昭和副讀本 卷四

4a
810
昭6

41704
教科書文庫
4
810
41-1931
20000
90689

昭和六年一月三十日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

保科孝一編

昭和副讀本

広島大学
教
90689
図書

育英書院發行

資料室
4a
810
AB6

昭和副讀本　卷四　目次

花月草紙

一　なしと聞けば……一
二　月のさしのぼる頃……三
三　月の夜半こそ……五
四　或人の庭見しが……一〇
五　詠歌大概に……一二
六　ある醫師……一三
七　鳶の子のすだちする頃……一四
八　事に處するに……一五

九　寢覺の里に……一六
一〇　深川の八幡の社の祭ある日……一八
一一　鷹の羽に棲む蟲……二〇

醒睡笑

一　仁物らしき男……二二
二　奉公人のはてと覺しきが……二三
三　小姓をおきて……二四
四　ある寺の院主……二四
五　井見の庄殿……二五
六　福の神……二六
七　うばが年代記……二七
八　市太郎殿の御親父……二八

九　杖つき蟲……三〇
一〇　とき人を待たず……三〇

玉かつま

一　田舍に古のわざの殘れる事……三三
二　古よりも後世のまされる事……三三
三　書うつし物かく事……三四
四　手かく事……三六
五　ふみよむ事のたとへ……三七
六、からうたのよみざま……三八
七、からごころ……三九
八　儒者の皇國の事をば知らずとてある事……四一
九　金銀ほしからぬかほする事……四二

一〇　富貴をねがはざるをよき事にする論……四三
一一　しづかなる山林をすみよしといふ事……四四
一二　物まなびのこゝろばへ……四五
一三　縣居の大人の傳……四七
一四　おのが物まなびの有りしやう……四九
一五　縣居の大人の御さとし言……五四
一六　師の説になづまざる事……五六
一七　前後と説のかはる事……五九
一八　あらたにいひ出でたる説……六一
一九　あらたなる説を出す事……六三

折たく柴の記

一　父の面影……六五
二　我が身の修業……七〇
三　元祿の地震……八一

日本永代藏

一　怪我の冬神鳴……九二
二　茶の十德も一度に皆……九八

駿臺雜話

一　手折りし枝をしたふ春風……一〇三
二　二人の乞兒……一一四
三　年にはづかし……一二〇

昭和副讀本　卷四

花月草紙

松平定信の隨筆百五十六篇を集めたもの。六卷。松平定信は田安宗武の第三子である。定邦の養子となつて磐城白河の城主となる。樂翁と號した。文政十二年歿す、年七十二。

一　なしと聞けば

「なし」と聞けば「あり」と言はまほしく、「惡しき」と言ふをば「善き」とことかへて言はんこそ、いとねぢけたる事なれ。櫻てふ花は我が國のものなるを、「唐國にもあり」とてさまざまの例など引き附くれど、櫻書いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、「なし」とこそ言ふべけれ。いでや櫻といはでしも、花とだに言へば

こと木には紛れぬものを。ほのぐと明け行く山際、雲か雪かとばかり咲き滿ちたるも、かすみこめたる夕間暮、花のけはひも朧に見えて、此處にのみ暮れ殘すけしきなど、いふは淺かりけり。まいて、うてなののびやかなれば近劣りするなどいふは、かのことかへてざえおふ心に言ふことなりかし。風に散りかふも、雨に濡るるも、遠山に見るも、軒端に向ふも、明ぼのも、夕ぐれも、露のひるまも、

めかるゝ時しなきを、ことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかたちもゆたけく、匂さへこちたからぬも。あやしきまでにこそ覺ゆるものなれ。さるを、「何處にもあり」といふは更なり、「曙・夕暮」などと面白からんやうにことば添ふるは、いまだ深く染めし心にはあらざりけり。すべて、ことばもて言ひ盡さんと思ふは、いと淺き心かな。

二　月のさしのぼる頃

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるにやゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず、からうじてさし昇りけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが近寄るほど、あやにくに月の方より雲のうちへかき入

定信筆蹟
明二其道一不レ計二其功一

るやうに見ゆ。こはいかにせんとしばし打ちまもるに、雲の端つ方あかう見ゆるにぞ、出で離れたらばはやかゝらん隈あらじと思ふに、いつのまにかまた白雲の月待顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれて打見るに、はじめの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ち居たる雲にむかへば、また馳せ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらにうらみはてで見ゐたるうちに、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくとむかひ居たれば、心のはてなきやうにこそ覺えしか。

定信筆蹟

三　月の夜半こそ

「月の夜半こそ、思ふくまもなく、心のそこも澄みわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、また優りぬるやうに覺ゆ。」といへば、「雨ぞいとまさりぬるを。」といふ。「いかに」と問へば、「いでや、旱天の雨はさらなり、草木の花咲き實るも皆この惠にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、『今日は元日なりけり。』といふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春やとぞ思ふめる。師走のみそか、のどやかに降りたるも、春待顔にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣濕せども降るとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、棲み捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭

のおもの枯生の底に緑やゝ添ひ行くも、柳の絲のうごきもやらで露そふも、ともにいと長閑なり。燈火挑げても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄みわたりぬるものぞかし。その外梅が香のしめり夜深くにほひわたるも、『花にうし』とかこちぬるも、哀はありけり。春も老い行くころ、蛙の時得顔にすだくもをかし。杜鵑の初音をいかにと思ふ頃、村雨のはら〳〵と降り出でたるも。

月（横山大觀筆）

五月雨の幾日も降り暮してふみの卷々繰返しつゝ居たれば、何となく世の中のことにも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬるころ、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹き落ちたるに、柳・蓮葉なんどの葉裏しろく見せたるもすゞし。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降りきて、物音も聞えず、土のにほひきたるもいと心地よし。軒端は玉の簾垂懸けたらんやうに、玉水のたえまなく落ちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし又は水はしらせたるに、人々しばし物言はでうちまもり居たるもをかし。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲のたち出でし方は、はや空のひとしほ碧に見えて虹なんど見ゆるに、木々のみどりの庭潦にかげ見ゆるもいと涼

し。老いたる女など雷の音におどろきて這ひ出でたるが、今日のは若かりし時のごと、よく霽れにけり。今時のは、かく霽るゝことは稀なり。』なんどはや繰言いふもあり。『かれはかくあわてき。』などいひて、かたみに笑ひとよみつゝ、『今日は蚊も少かるべし、かみの音もいとかすかなり、このごろの暑さも忘れぬ。』とて端近う出づれば、夕月の光さしわたりて草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙のもものまち顔に空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋くるころの雨は昨日にかはりて、何となうさびし。荻の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身に沁むこゝちぞする。常に聞き馴れし筧の水の音までもあはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいて、やゝ夜寒のころ鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕ちかく鳴き寄るもあはれなり。『この雨に

木々も染めなん。』と思へば、『茸などもおひ出でなん、栗もはや落つべし。』などと、わらはべのものさびしげに燈火にむかひつゝ言ひ出づるも、げにさまゞ〳〵なり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、鐘撞く人の心までもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染め添ふるも、白菊のうつり行きて一盛見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきゞ〳〵し。朝顔のみな枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、ひる過ぐるまで萎みおくれたる、又あはれなり。野分の風はおどろ〳〵しきものから、雨は夕立に劣らざれど、流石に哀を添ふるは秋のならひなるべし。時雨のさと音して夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、あはれ深きものには侍らずや。』とい

へば「かうやうに云ひ竝べては、げにもと言ふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつ日より降り出でしをと思ふ心は變らじ」と心の中に思ひて聞き居しも、またをかしかりけり。

四　或人の庭見しが

或人の庭見しが、松の枝をため葉をすかし、一草一木皆作り立てて小なるも、たゝずまひをかしくなしたるを、翁殊に譽めにけり。かへりて後に、「翁の常に好み給ふは、草は階前よりたちのび、松も檜ばらもおのがまゝになしおき給ふかと思へば、今日の庭をば殊に譽め給ふはいかに」と問ふ。「何もさせることわりなし。世の人わが好む所に合ふものをば譽めのゝしり、心に合はぬものをば譏りな

木野狐　碁盤のこと、人を媚惑することと狐の如くなるよりいふ

どすれど、ことわり盡して思ふにはあらず。茶たつること好むものは碁など圍むものを見て、『惜しき月日を空しくし給ふ、木野狐の名を忘れ給へりや。』などいへど、茶たつるも一時の心やりにて、よきあしき言ふべき品もなし。いで、この庭といへば、室町のころの庭の殘れるを見ても知るべし。野山の景色なすも亦假に作りなしなり。實にさま〳〵の石など面白かれとなしたるは、面白から

古庭（醍醐三寶院茶室）

詠歌大概　藤原定家の著した歌學の書

日々に新なり　大學に、湯之盤銘曰、苟日新日日新、又日新

ぬやうもなし。翁が庭はといへば、おのがまゝになすにて、古の庭などの意とも違へば、心高きわけもなし。くれなゐ・むらさきの色よしとて賞しぬれど、衣にして翁など着まほしとは思はざるなり。わが心にたがへば譏るは、皆ことわり知らぬもののする事にや。」

五　詠歌大概に

詠歌大概に「情は新しきを先にす。」といふ事をなにくれといへど、こはかの「日々に新なり。」といふ心ばへにて流るゝ水のごとし。されば よきをあしく、あしきをよくなど引違へていふは珍しきにて新しきとはいはじ。花を雪と見、雪を花と見る、幾度いふともわがまことより言へばいつも新し。心してわざといふは新しきといふものならず。

六　ある醫師

ある醫師ありけり。病む者あれば、かみしも選まず、いとせちに心を盡しけり。いといたう賤しき者病めるありけり。藥箱出いて藥調ずるに、その母なりける老婆のつくづくと見て居しがゐざり出でて、「はゞかりなる事ながら、ねぎおもふ事こそ侍れ。」とていと言ひかねたるを、「何の事にてもあれ、思ふことは打ちあらはして言ひね。」といへば、つゝましげに聲ふるはして、「下に組み置き給ふ箱の御藥も賜はれかし。」と言ひけるにぞ、思はずほゝゑみて、「さらば與へん。」とて、下にありしがうちの障なき藥二三取出でて調ぜしが、必ずその藥はしるしあるべし。」と語りぬ。かくおろかなる者に、「この病には何といふ方劑調ずることなり、それは何々の藥を用ふ、この箱の

上の方におのづから入れ置きたれば、取り出して調ぜしなり、下に組みたる箱のとて、貴き賤しきの隔なし」とまめだちて言ふとも、いかで聞き分くべき。さはりなくば、その心に任するにてこそ、をかしかりけれ。

七　鳶の子のすだちする頃

鳶の子のすだちする頃、兄鳥の巣より飛び出でしに、弟のは羽もいまだ整はざるを知らで、つひに飛びたれば梢より落ちてけり。親鳥いかに思へども、形ははや親にまさるばかりに羽のふくらかにおひたちたれば、せん方なく巣に入りて呼べども、もとより飛び得ざれば、立返るべきやうなし。二三日たちて見るに、同じところにうづくまり居たり。捕へて見れば動きもやらず、いと飢ゑに飢ゑ

たるさまなれば、一夜さまぐ〳〵餌を與へてけり。あけの日は、餌をやらんとすれば、恐しき姿しておどす。昨日は餓ゑてければ、その心も出で來ざりきと見えき。人をおどすはにくさげなれども、この儘にして殺さんも忍びずとて、はぐゝみやりけり。二十日ばかりたちてければ、羽もよく整ひぬ。さらばとてもとの木蔭に連れ行きて、籠よりやをら出したれば、おのれからうじて逃げ出でしさまして飛び行きぬ。親鳥も、人のかくしてかくは放ちしは知らず、かしこく籠を出でしよと心得しさまして、連れていにけり。

八　事に處するに

事に處するに、利害・得失に心をつくるも宜なれども、まづそのことの筋をよく見て、さて利害・得失をも照し見るべし。世にいふ才あ

るものは、まづわが利害得失はやく見ゆれば、利に就き害に遠ざからんとのみして、その筋を失ふなり。たゞ害ありとも、かくすべしといふはいといたう重き筋の事なり。されば、その筋の重きと輕きと、利害の重きと輕きとかけ合せても、その筋の方重きは害にあふとも、その筋にしたがふべし。また才なくして筋にも暗く、たゞ一筋に心得るものは、筋の輕きにも重き害を得て辭せずとするもありぬべし。才ありても道まねびて明かなるにあらざれば、輕きを重しとして、つひに道失ふものこそ多かめれ。

九　寢覺の里に

寢覺の里に行きて見れば、あないの者出で來て、「この岩は獅子といふ、虎といふ。」など教ふるもうるさく、「いかでこは獅子なるべき、これ

はは虎の形とは見えぬを。」なんどとひとつ〳〵言ひ消たして行きぬ。そのかへさの道に名もなき岩のありしをふと見れば、「よくもましらの腰掛けし姿に似たり。」といへば、「げに」と人もいひけり。あとより來たる人を招きて、「ましらに似たる石あり。」とほこらしげに言ひて、「これ見給へ。」といへば、「似たるところなし。」といひけり。明の年かの寢覺の里へ行きて見しが、案内の者の言ひしことば早忘れてければ、「これ虎の姿なり、これは獅子の勢なり。」と見なしぬ。はじめは「虎よ、獅子よ。」と聞

寢覺の床

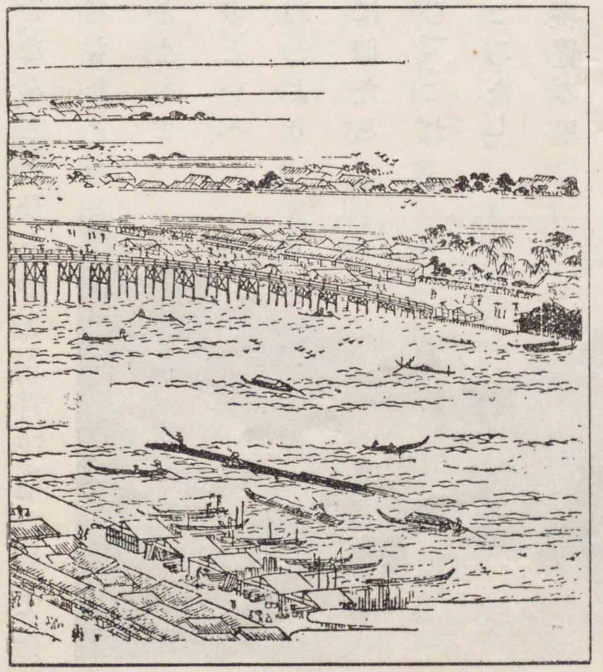
深川の八幡
今東京市深川區富岡門前町にある大きなる橋永代橋をさす

きて見れば、似たるやうには思はざりしが。

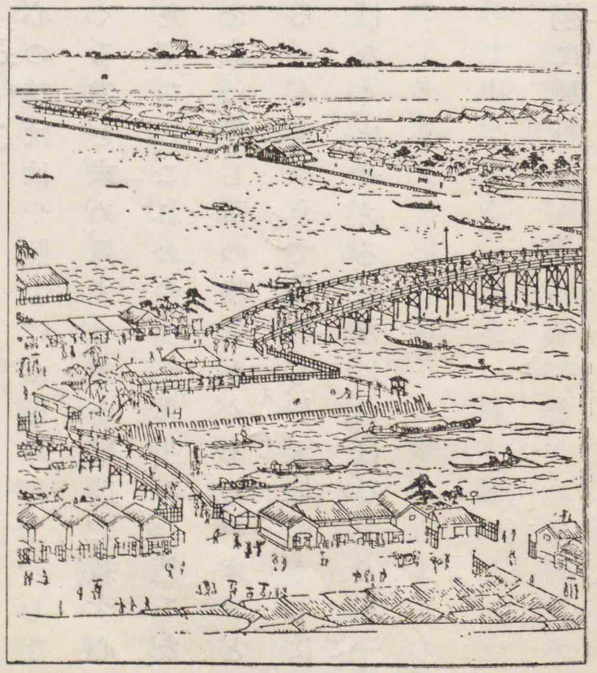
一〇 深川の八幡の祭ある日

深川の八幡の社の祭ある日、多くの人見に行きけり。二つ三つばかりの子を抱きて母の行きたるが、大きなる橋あり、渡らんとすれど、その子のひた泣きに泣きて止まず。橋を渡らじとかへれば、泣き止みつ。「いかにしつることよ」とてさまざまにすれど、初にかはらず。「まづさらば、こゝらに息ふべし」とて橋のかたはらに居たるが、しばしして橋の上の人騒ぎ立ちて、聲のかぎりに呼びつゝあわてふためき逃げ惑ふ。いかなることとも分かず。よくかりし人千人ばかりも落ちぬ」となり。それを聞くより、かの母も覺えず涙落ちてけり。「いかにしてこの子の知りつらん、神佛の助

永代橋



（江戸名所圖繪）



け給ひしなり。」とて伏し拜みつゝ急ぎ歸りにけり。その子のみかは、その母も知りたれども、たゞ私の心におほはれて照し得ぬなりけり。もとよりその災に遭ふものは、おもてにも溢れて、そのあしき色をあらはすべければ、心の鏡ははや照しけんを、知らざりしなり。こは蟲けらもその生くる道を求め、死すべきを厭ひて、殺す心なきものには馴れ近づくたぐひは、これおのづから生々の德そなへし大空の御心にて、それを享け得し萬の物皆かくあるべきことなり。されば卜にあらはるゝも龜やきて見るも、皆天地のうちにあるとあるもの知らざるはなく、感ぜざるはなければ、ひじりも一の教とものし給ふとや。

一一　鷹の羽に棲む蟲

鷹の羽に棲む蟲ありけり。空高く飛び翔る時は、遙に人の住家などをも見下しつ。「げにわれは事足れる身かな。翼も動かさで千里の遠きに行き通ひ、雲居のよそまでも揚るめり。殊にさまざまの鳥は皆おそれて逃げ走る。げにもわれに勝つものは大方あらじ。」など思ひつゝ、かの鷹の毛うちに居つゝ頻にしゝむらを刺し血を吸ひて居しが、そのやからいと多くなりもて行きしにや、つひにその鷹も斃れにけり。それより自ら出でて飛び翔らんと思へども、飛び得ず、走らんと思へども、速かならず。血も盡きしゝむらも枯れぬれば、今は命つなぐやうもなし。からうじて、まづその毛のうちをくゞり出でて這ひ行けば、雀の子の居たりけり。「われを恐れなん」と見れば、雀の子は知らぬさまなり。「いかにして見つけざるか」と傍へ這ひ寄れば、うれしげに見て嘴さし出して喙(ツイバ)まんとす。

「例なきことなれば、おそろしくて逃げ隠れぬ」とかの友どちに語りにけり。

醒睡笑

睡をさますやうな笑話を集めたもの。八巻。江戸時代の笑話集として代表的のものである。著者は策傳といふ僧で、京都誓願寺の竹林院に住し、安樂庵を作つて隠居し、後水尾天皇の寛永十九年に八十九で歿した。

一　仁物らしき男

仁物らしき男、枕の前後に鯛を入れ擔ひ、「たひは、たひは」と賣りけるを、ある家の主呼び入れて、「けしからず寒き日なり。まづちと火にもあたり、茶を飲みておとほりあれ。ちらと一目見しより、これは

たゞならず、古はさもありし御身なりしが、思はずも世におちぶれて、かゝるわざをもし給ふにやと、涙をこぼし候ひぬ」と、言ひければ、靜に火にあたり、茶など飲みて、たちざまに大いなる鯛を一つ亭主が前に差出したり。「こは何としたる事」としんしやくしければ、「いや、けふは心ざす先祖の頼朝の日なり」。

亭主の略

二　奉公人のはてと覺しきが

奉公人のはてと覺しきが、宿をかり、四方山のことをかたりつくしけり。亭ほめて、「いかさま唯の人とは見え候はず。もはや休み給へ。夜著を參らせんや」といふ。「いや、いかほどの野陣・山陣をしつけ、せう〳〵寒き事をば知らず。無用」というて著のまゝいねけるが、夜ふくるに從ひ、ひたものの寒し。「時に亭主々々、こゝの鼠には、足

をあらはせたか。」と問ふ。「いや左様の事はなし。」と答ふ。「それならば、むしろを一二枚きせられよ。鼠がきた物をふまばさむからうずに。」と。

三　小姓をおきて

小姓をおきて、試みに始めて茶をひかするに、事の外あらし。「是は。」と叱りたる時、ちと座をしさり、「それはまづあらびきで御座る。」と。「さて〳〵おのれは、日本に又二人ともあるまいうつけや。」とあれば、又きつと手をつき「いや日本も廣う御座るほどに、お尋ねあらばまだも御座らう。」と。

四　ある寺の院主

ある寺の院主に知音の人ありて、門前までおとづれられけるを、弟子出て見つけ、そのまゝ方丈に行き、「ものの御出でにて候。」といふ。院主大いに腹をたて、「ものとは誰が事ぞ。さてもうつけを盡す奴かな。いざわれ出でて見ん。」とて、窓よりそと覗き、つく〴〵見るに、顔ばかり覺え、つひに名をばうち忘れ、弟子に向ひ「誠にものぢやよ。」といへり。

五　井見の庄殿

越中に井見の庄殿といふ大名あり。世にすぐれたるうつけなりし。母儀常にくやみ歎き給ひしが、ある時の見參に、「笑止や、そなたは、内の者侮り、何事もいひたきまゝにいうて、道なき作法と聞く。ちと折ふしは齒をもぬき折檻もあらば、さほどまではあるまじき

齒をもぬき　齒をむき出して怒ること

物を。と教訓あれば、心得たりとうけがひ、是非ともに一齒をぬかんものをとたくまれし。さるほどに八朔の禮とて諸侍出仕ある。家老の人申すやう、「今日の御祝儀千秋萬歳、ことに天氣能く。」と祝ふなかばに、彼の大名、「なにと、御祝儀天氣もよしと、さういひたきまゝにはいはせまいぞ。」

八朔の禮　陰曆八月一日、家康江戸入城の日として徳川時代には式日であつた

六　福の神

けしからず物毎にいはふ者ありて、與三郎といふ仲間に、大晦日の晩いひをしへけるは、「今宵は常よりとく宿にかへりやすみ、あすは早くおきて來り門をたゝけ。内よりたそやと問ふ時、『福の神にて候。』とこたへよ。すなはち戸をあけて呼びいれん。」と、ねんごろに言ひ含めてのち、亭主は心にかけ、鶏のなくと同じやうにおきて門に

まちゐけり。案のごとく戸をたゝく。「たそ、たそ。」と問ふ。「いや與三郎」とこたふる。不興なかゝながら門をあけてより、そこもと火をともし、若水を汲み、かんをすうれども、亭主顔のさまあしくて、さらに物いはず。仲間ふしんに思ひ、つくゞ思案しゐて、よひにをしへし福の神をうちわすれ、やうゝ酒をのむころにおもひ出し、仰天し、膳をあげ座敷を立ちざまに、「さらば福の神でござる。おいとま申し參らする。」というた。

かん　雜煮

七　うばが年代記

母の娘にむかひ、「そちははや年二十になれど、つひに苧をうむすべさへ知らいで。」と叱りけるを、隣なる家主の女房居あはせて、「それやうに、あひだてなさうに物はいはぬものぢや。これのお五はこと

お五　御娘

すうだ
きまつてゐる

し二十にこそならるれ。智慧もつく時分があるものぞ。」と言ひなだめければ、「そなたよりわれがうみの母にてよく知りたり。あれは二十になるにすうだ。」といふ。「二十でこそあれ。」といさかひ果てず。かゝるところへ年至極の姥來り、「何事をいうてからかひ給ふぞ。あのお五の年ならば、なにのまぎれもない事が、われが處にある、とりて來て理をすまさん。」と、急ぎ内に行き、大なるふくべを一つとりて來れり。「こは何物ぞや。」と問ふ時、「これでざつとすうだ。あのお五のうまれどしに、此のふくべがなりてあつた。」と。うばが年代記にていよ〳〵知れず。

八　市太郎殿の御親父

一生よみかきの望もなく、唯富貴して世を送る人あり。名を福右

たうど
さしあたり

衛門とつき、惣領を、市太郎、弟を市二郎とてあり。貧者あつまり、手をつかね、ひざをかゞめてもてはやしけり。ある時市二郎を始めて見たる者、「これはどなたにて候や。」と問ふに、あれこそ市太郎殿の舍弟候よ。」とかたる。「されば、かりそめ見たる體、あにごより舍弟の器量はまして。」などほめけり。その一座過ぎて市二郎親にむかひて、「われになにとも名がなくば大事もないが、幸ひてゝの市二郎とつけておかれたに、やゝもすればうつけ者が來たりては、市太郎の舍弟々々といふ。たうどこれが氣の毒や。」と。福右衛門きゝて、「さあらうずる。それほどの事をばこらへよ。世の中はふせうばかりぞ。われがまへでも福右衛門といふ名をばいはずして、ひようふつと市太郎殿の御親父とさへいふ程に。」と云はれた。

九　杖つき蟲

人のかよひもまれなる山中にて、座頭の琵琶を負ひ、岨のかけぢをつたふあり。薪をひろひ居たる賤の男これを見附け、むかうの谷に友達のゐけるを高聲に呼び、「やい〳〵あの杖つきむしの出たを見よ。あら珍らしや、つひに一期に見ぬ蟲や。」と呼ばはる時、「此の十年ばかり先に、あの蟲が此の道へ出てあつたが、その年そばがよかつた。今年もさてはそばがよからうずよ。」と。

一〇　とき人を待たず

もと同學たりし人のもとへ、「廣韻をちと貸したまへ。」といひやりたれば、「此方にもいる。」とて貸さず。後に逢うたるに、「以前はいなものを貸されなんだ。」と恨みければ、「光陰をしむべし。」とありけり。借主

廣韻　音韻に關する書

遺恨を含み、重ねて先のをしみての方へ、「明朝齋を申さん。」といひやりぬ。必ずゆかんよし返事なりき。亭、曉より起きて朝食をいそぎ用意し、内の者にも早々くらはせ、棚もとの掃除をきれいにして置きたり。件の僧來り、まてども更に飯をくるゝ音せず。「何とて膳は遲きぞ。」「とき人を待たずとあれば、早や疾く過ぎたは。」

玉かつま

本居宣長の隨筆で、十五卷より成る。宣長は有名な國學者で、世に荷田春滿・賀茂眞淵・平田篤胤と合せて國學の四大人と稱す。古事記傳はその不朽の大著である。享和元年に、七十二で歿した。玉かつまは宣長が六十四歳の正月から筆を執つて、歿年まで書いたものの抄錄である。

一　田舍に古のわざの殘れる事

言葉のみにもあらず、よろづのしわざにも、かたゐなかには、いにしへざまの、みやびたることの、のこれるたぐひ多し。さるを例のなまざかしき心ある者の、立ちまじりては、かへりてをこがましくおぼえて、あらたむるから、いづこにもやう〳〵に、ふるき事のうせゆくは、いとくちをしきわざなり。葬禮・婚禮など、ことに田舍には、ふるくおもしろきことおほし。すべてかゝるたぐひの事どもをも、國々のやうを、海づら山がくれの里々まで、あまねく尋ね、聞きあつめて、物にもしるしおかまほしきわざなり。葬・祭などのわざ後の世の物しり人の考へ定めたるは、中々にからごゝろのさかしらのみ多くまじりて、ふさはしからず、うるさしかし。

二　古よりも後世のまされる事

古よりも、後世のまされること、萬の物にも事にもおほし。其の一つをいはむに、いにしへは、橘をならびなき物にしてめでつるを、近き世には、居みかんといふ物あり、宣て、このみかんに長くらぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。その外、かうじ・ゆ・くねんぼ・だいだいなどのたぐひおほき中に、蜜柑ぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似て、こよなくまさ

れる物なり。この一つにておしはかるべし。或は古にはなくて、今はある物もおほく、いにしへはわろくて、今のはよきたぐひ多し。これをもておもへば、今より後も又いかにあらむ、今にあされる物おほく出で來べし。今の心にて思へば、古はよろづに事たらず、あかぬ事おほかりけむ。されどその世には、さはおぼえずやありけむ。今より後また、物の多くよきが出でこむ世には、今をもしか思ふべけれど、今の人、事たらずとはおぼえぬが如し。

三　書うつし物かく事

ふみをうつすに、同じくだりのうち、あるはならべるくだりなどに、同じ詞のあるときは、見まがへて、そのあひだなる詞どもを、うつしもらすこと、つねによくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら

宣長筆蹟
これやこの心もしらでとりはなつおやのもりけむ佐野の舟橋　宣長

重ねてかへしては、そのあひだ一ひらを、みながらおとすことも有り。これらつねに心すべきわざなり。又よく似て、見まがへやすきもじなどは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにもあらず、おほかた物かくに、心得べき事ぞ。すべて物をかくは、事のこゝろをしめさむとてなれば、おふなく、もじさだかにこそかゝまほしけれ。さるをひたすら、筆のいきほひを見せむとのみしたるは、いかなることとも、よみときがたきが、よに

本居宣長筆蹟

おほかる、あぢきなきわざなり。常にかきかはす消息文なども、もじよみがたくては、いひやるすぢ、ゆきとほらず。よむ人、はた、くるしみて、かしらかたぶけつゝ、かへさひよめども、つひによみえずなどしては、こゝよみがたしと、かへしとはんも、さすがになめしきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては、事たがひもするぞかし。

四　手かく事

よろづよりも、手はよくかゝまほしきわざなり。歌よみ、がくもんなどする人は、ことに手あしくては、心おとりのせらるゝを、それ何かはくるしからむといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかず、うちあはぬこゝちぞするや。宣長いとつたなくて、つねに筆とるたびに、いとくちをしう、いふかひなくおぼゆるを、人の

こふまゝに、おもなく、たんざく一ひらなど、かき出でて見るにも、我ながらに、いとかたはに見ぐるしう、かたくなるを、人いかに見るらむと、はづかしくむねいたくて、わかゝりしほどに、などて手ならひはせざりけむと、いみじうくやしくなむ。

須賀の直見
松坂の人にて宣長の門人

五　ふみよむ事のたとへ

須賀の直見がいひしは、「廣く大きなる書をよむは、長き旅路をゆくがごとし。おもしろからぬ所もおほかるを經行きては、又おもしろくめさむるこゝちする浦山にもいたるなり。又あしつよき人は、はやく、よわきは、ゆくことおそきも、よく似たり。」とぞいひける。をかしきたとへなりかし。

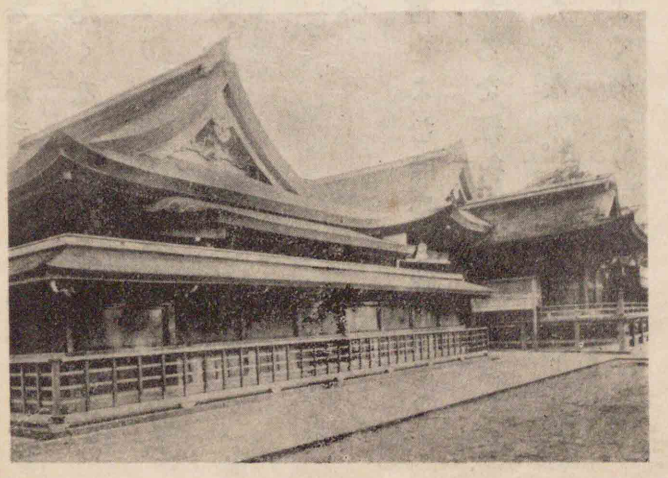
童蒙抄
古來の歌を拔出してその出所典故などを記した書

北野
京都の北野神社

東行西行云云
菅公の詩句

六　からうたのよみざま

童蒙抄に、『ある人北野にまうで、『東行西行雲眇々、二月三月日遲々』といふ詩を詠じけるに、すこしまどろみたる夢に、『とざまにゆきかうざまにゆきて雲はるゝ〳〵、きさらぎやよひ日うら〳〵、とこそ詠ずれ。』と仰せられけり云々。』とあり。　昔は詩をも、うるはしくは、かくざまにこそよみあげけめ。　詠むるはさらなり、いにしへはすべてからぶみをよむにも、よまるゝかぎりは、皇國言によめるは、字音は聞きにくかりしが故なり。



北野神社

然るを今はかへさまになりて、なべての詞も、皇國言よりは、字音なるをうるはしきことにし、書よむにも、よまるゝかぎりは、字音によむをよきことゝすなるは、からぶみまなびのためには、字音によむかた、よろしき故もあればぞかし。

七　からごころ

からごころとは、漢國のふりを好み、かの國をたふとぶのみをいふにあらず、大かた世の人の、萬の事の善さあしさをあげつらひ、物のことわりをさだめいふたぐひ、すべてみなからぶみの趣たるをいふなり。　さるはからぶみをよみたる人のみ、然るにはあらず、書といふもの一つも見たることなき者までも、同じことなり。　そも、からぶみをよまぬ人は、さる心にはあるまじきわざなれども、何わざ

も漢國をよしとして、かれをまねぶ世のならひ、千年にもあまりぬれば、おのづからそのこゝろ世の中にゆきわたりて、人の心の底にそみつきて、つねの地となれる故に、我はからごころもたらずと思ひ、これはからごころにあらず、「當然之理」なりと思ふことも、なほからごころをはなれがたきならひぞかし。

そも〳〵人の心は、皇國も外つ國も、ことなることなく、よさあしさに二つなければ、別にからごころといふこと、あるべくもあらずと思ふは、一わたりさることのやうなれど、然思ふもやがてからごころなれば、とにかくに此の意は、のぞこりがたきものになむ有りける。人の心の、いづれの國もことなることなきは、本のまごころこそあれ。からぶみにいへるおもむきは、皆かの國人のこちたきさかしら心もて、いつはりかざりたる事のみ多ければ、眞心にあらず。

かれがよしとする事、實のよきにはあらず、あしとすること、まことのあしきにあらざるたぐひもおほかれば、よさあしさに二つなしともいふべからず。又「當然之理」とおもひとりたるすぢも、漢意の「當然之理」にこそあれ、實の「當然之理」にはあらざること多し。大かたこれらの事、古き書の趣をよくえて、からごころといふものをさとりぬれば、おのづから、いとよくわかるゝを、おしなべて世の人の心の地、みなからごころなるがゆゑに、それをはなれて、さとることのいとかたきぞかし。

八　儒者の皇國の事をば知らずとてある事

儒者に皇國の事をとふには、しらずといひて、恥とせず。から國の事をとふに、しらずといふをば、いたく恥と思ひて、しらぬことをも

しりがほにいひまぎらはす。こはよろづをからめかさんとするあまりに、その身をも漢人めかして、皇國をば、よその國のごと、もてなさむとするなるべし。されどなほから人にはあらず、御國人なるに、儒者とあらむものの、おのが國の事しらであるべきわざかは。但し皇國の人に對ひては、さあらむも、から人めきてよかんめれど、もし漢國人のとひたらむには、我は、そなたの國の事はよくしれれども、わが國のことはしらずとは、さすがにえいひたらじをや。もしさもいひたらむには、己が國の事をだにえしらぬ儒者の、いかでか人の國の事をばしるべきとて、手をうちて、いたくわらひつべし。

九　金銀ほしからぬかほする事

金銀ほしからずといふは、例の漢やうのいつはりにぞ有りける。

學問する人など、よき書をせちに得まほしがるものから、金銀はほしからぬかほするにて、その僞はあらはなるをや。いまの世よろづの物、金銀をだに出さば、心にまかせてえらるゝものを、よき書ほしからむには、などか金銀ほしからざらむ。然はあれども、はゞかることなくむさぼる世のならひにくらぶれば、僞ながらも、さるたぐひは、なほはるかにまさりてぞ有るべき。

一〇　富貴をねがはざるをよき事にする論

世々の儒者、身のまづしく賤しきをうれへず、とみさかえをねがはず、よろこばざるを、よき事にすれども、そは人のまことの情にあらず、おほくは、名をむさぼる例のいつはりなり。まれ〳〵にさる心ならむもの有りとも、そは世のひがものにこそあれ、なにのよき事

ならむ。ことわりならぬふるまひをして、あながちにねがはむこそは、あしからめ。ほどゝ〳〵につとむべきわざを、いそしくつとめて、なりのぼり、富みさかえむこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ、身おとろへ家まづしからむは、うへなき不孝にこそ有りけれ。たゞおのがいさぎよき名をむさぼるあまりに、まことの孝をわするゝも、又もろこし人のつねなりかし。

一一　しづかなる山林をすみよしといふ事

世々の物しり人、又今の世に學問する人なども、みな、すみかは、里とほくしづかなる山林を、住みよくこのましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにか、さらにさはおぼえず。たゞ人げしげく、にぎはゝしきところの、好ましくて、さる世ばなれたるところな

どは、さびしくて、心もしをるゝやうにぞおぼゆる。さるは、まれ〳〵にものして、一夜たびねしたるなどこそは、めづらかなるかたに、をかしくもおぼゆれ、さる所に、つねにすまゝほしくはさらにおぼえずなむ。人の心はさま〴〵なれば、人うとく、しづかならむところを、すみよくおぼえむも、さることにて、まことにさ思はむ人も、よには多かりぬべけれど、又例のつくりごとの、漢ぶりの人まねに、さいひなして、なべての世の人の心とことなるさまにもてなすたぐひも、中には有りぬべくや。かく疑はるゝも、おのが俗情のならひにこそ。

一二　物まなびのこゝろばへ

むかしは、皇國のまなびとて、ことにすることはなくて、たゞからま

なびをのみしけるほどに、世々をふるまゝに、いにしへの事は、やうやうにうとくのみなりゆき、から國の事は、やう〳〵にしたしくなりもてきつゝ、つひにそのこゝろは、もはらからざまにうつりはて、上つ代のことは、物の意はさらにもいはず、言葉だに、聞きしらぬ異國のさへづりをきくがごと、ものうとくぞなりにける。かくて後にいたりて、皇國のまなび、もはらとする事もはじまりつれども、しかからごころの、久しくしみつきたる人心にしあれば、たゞ名のみこそ、皇國の學びには有りけれ、いひといひ、おもひと思ふことは、なほ皆からにぞ有りけるを、みづからも、さはおぼえざるなめり。されば近き世、まなびの道ひらけて、よろづさかしくなりぬるにつけても、なか〳〵にそのからごころのみ、深くさかりにはなりて、古の意は、いよ〳〵はるかになむなりにけるを、此のちかきころにな

神直毘神
大直毘神
直からざるを直くしたまふ神

姓氏錄
新撰姓氏錄三十卷、桓武天皇の皇子萬多親王等の撰、詳に日本の姓氏を記す
文永十一年
龜山天皇の御世、北條時宗執權の時

りてぞ、そこに心つきぬる人の出で來そめて、世は皆からなることをさとりて、人も我も、いにしへのこゝろをたづぬる意の、明りそめぬる、しかすがに神直毘・大直毘の神のましましける世は、なほゆくさき、いとたのもしくなむ。

一三　縣居の大人の傳

あがたゐの大人は、賀茂の縣主氏にて、遠祖は、神魂の神の孫、鴨武津之身の命にて、八咫烏と化りて、神武天皇を導き奉り給ひし神なること、姓氏錄に見えたるがごとし。この神の末、山城の國相樂の郡岡田の賀茂の大神を以、齋く。師朝といひし人、文永十一年に、遠江の國敷智の郡濱松の庄岡部の鄕なる、賀茂の新宮をいつきまつるべきよしの詔を蒙りて、かの鄕を賜はり、すなはち彼の新宮の神主

引馬草 遠江濱松領に關する名所舊蹟を記した書

乾元元年 後二條天皇の御世、北條師時執權の時

引馬が原の御軍 引馬原は遠江の濱名郡にあり元龜三和家康は信玄と此に戰つた

來國行 鎌倉時代の刀匠

三河記 三河軍記、詳に德川家康の軍事を記す

稻荷 伏見の稻荷神社、荷田東麻呂は國學者

田安の殿 田安宗武、德川吉宗の第二子、國學を好む

になさる。この事引馬草に見え、又綸旨の如くなるものあり。又乾元元年にも、詔をかうぶりて、かの岡部の地を領せらる。これは正しき綸旨有りて、家に傳はれり。かくて世々かの神主たりしを、大人の五世の祖、政定といひし引馬が原の御軍に功有りて、東照神の御祖の君より、來國行がうちたる刀と、丸籠の具足とを賜はりぬ。この事は三河記にも見えたり。さて大人は元祿十年に、この岡部の郷に生れ給ひて、わかゝりしほどより、古學びにふかく心をよせて、享保十八年に、京にのぼりて、稻荷の荷田の宿禰東麻呂の大人の教をうけ給ひ、寛延三年に、江戸に下り給ひて、その後田安の殿に仕へ奉り給ふ。かの殿より、葵の文の御衣を賜はり給へる時の歌、

あふひてふあやの御衣をも氏人の
かづかむものと神やしりけむ

明和六年十月晦の日、とし七十三にて、みまかり給ひぬ。武藏の國荏原の郡品川の東海寺の中、少林院の山に葬る。こは大人の弟子なる某が、しるしたるまゝに、とりてしるせり。なほ父ぬし母とじなどをも、しるすべきものなるに、もれたるは、又よくしりたらむ人にとひきゝて、しるすべくなむ。

一四

おのが物まなびの有りしやうおのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむ、よろづよりもおもしろく思ひて、よみける。さるは、はかゞしく師につきて、わざと學問すとにもあらず、何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなくて、たゞからのやまとの、くさ〳〵のふみを、あるにまかせ、うるにまかせて、ふるきちかきをもいはず、何くれとよみ

けるほどに、十七八なりしほどより、歌よまゝほしく思ふ心いでき
て、よみはじめけるを、それは師にしたがひて、まなべるにもあらず、
人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出るばかりなりき。
集どもも、古きちかき、これかれと見て、かたのごとく今の世のよみ
ざまなりき。
かくてはたちあまりなりしほど、學問しにとて、京になむのぼりけ
る。さるは十一のとし、父におくれしにあはせて、江戸にありし家
のなりはひをさへに、うしなひたりしほどにて、母なりし人のおも
むけにて、くすしのわざをならひ、又そのために、よのつねの儒學を
もせむとてなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄
を、人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の説をしり、その世に
すぐれたるほどをもしりて、この人のあらはしたる物、餘材抄・勢語

改觀抄　僧契沖の著　百人一首の註釋書
契沖　大阪の僧國學者
餘材抄　古今集の註釋書
勢語臆斷　伊勢物語の註釋書

臆斷などをはじめ、その外もつぎつぎに、もとめ出でて見けるほど
に、すべて歌まなびのすぢの、よきあしきけぢめをも、やう〳〵にわ
きまへさとりつ。さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは、大
かた心にかなはず、その歌のさま
も、をかしからずおぼえけれど、そ
のかみ同じ心なる友はなかりけ
れば、たゞよの人なみに、こゝかし
この會などにも出でまじらひつ
つよみありきけり。さて人のよ
むふりは、おのが心にはかなはざりけれども、おのがたてよむふ
りは、今の世のふりにもそむかねば、人はとがめずぞ有りける。そ
はさるべきことわりあり、別にいひてむ。

契沖

冠辭考　枕詞の註釋書

萬葉の説　契沖の萬葉代匠記の説、萬葉は奈良時代以前の歌を集めた歌集

さて後、國にかへりたりしころ、江戸よりのぼれりし人の、近きころ出でたりとて、冠辭考といふ物を見せたるにぞ、縣居の大人の御名をも、始めてしりける。かくて其のふみ、はじめに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりことゝほく、あやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、なほあるやうあるべしと思ひて、立かへり今一たび見れば、まれ〳〵にはげにさもやとおぼゆるふしぶしもいできければ、また立ちかへり見るに、いよ〳〵げにとおぼゆることおほくなりて、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、つひに古ぶりのこゝろことばの、まことに然ることをさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける。おのが歌まなびの有りしやう、大かたかくのごとくなりき。

さて又道の學びは、まづはじめより、神書といふすぢの物、ふるきちかき、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどより、わきて心ざし有りしかど、とりたててわざとまなぶ事はなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばむと、こゝろざしはすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものの説くおもむきは、みないたくたがへりと、はやくさとりぬれば、師と頼むべき人もなかりしほどに、われ、いかで古のまことのむねを、かんがへ出でむと、思ふこゝろざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへす〳〵よみあぢはふほどに、いよいよ心ざしふかくなりつゝ、この大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年このうし、田安の殿の仰せ事をうけたまはり給ひて、此のいせの國より、大和、山城など、こゝかしこと尋ねめぐられし

事の有りしをり、この松坂の里にも、二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆしらで、後にきゝて、いみじくくちをしかりしを、かへるさまにも、又一夜やどり給へるを、うかゞひまちて、いと〳〵うれしく、いそぎやどりにまうでて、はじめて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教へをうけたまはることになりたりきかし。

一五　縣居の大人の御さとし言

宣長三十あまりなりしほど、縣居の大人の教へをうけたまはりそめしころより、古事記の注釋を物せむのこゝろざし有りて、そのことを、うしにもきこえけるに、さとし給へりしやうは、「われももとより、神の御典をとかむと思ふ心ざしあるを、そはまづ、からごゝろを清くはなれて、古のまことの意をたづねえずはあるべからず。然る

にその古のこゝろをえむことは、古言を得たるうへならでははあたはず。古言をえむことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に、吾はまづ、もはら萬葉をあきらめむとする程に、すでに年老いて、のこりのよはひ、今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなく、いそしみ學びなば、その心ざしとぐること有るべし。たゞし世の中の物まなぶともがらを見るに、皆ひきゝ所を經ずて、まだきに高きところにのぼらむとする程に、ひきとところをだにうることあたはず、まして高き所は、うべきやうなければ、みなひがごとのみすめり。此のむねをわすれず、心にしめて、まづひきゝところよりよくかためおきてこそ、たかきところにはのぼるべきわざなれ。わがいまだ神の御ふみをえとかざるは、

もはら此のゆゑぞ。ゆめしなをこえて、まだきに高き所をなのぞみそ。」と、いとねもごろになむ、いましめさとし給ひたりし。この御さとし言の、いとたふとくおぼえけるまゝに、いよ〳〵萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞして、いにしへのこゝろ詞をさとりえて見れば、まことに世の物しり人といふものの、神の御ふみ説ける趣は、みなあらぬ漢意（カラゴコロ）のみにして、さらにまことの意ばへえぬものになむ有りける。

一六　師の説になづまざる事

おのれ古典（イニシヘブミ）をとくに、師の説とたがへること多く、師の説のわろき事あるをば、わきまへいふこともおほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これすなはちわが師の心にて、つねにを

しへられしは、後によき考の出できたらむには、かならずしも師の説にたがふとて、なはゞかりそ。」となむ、教へられし。こはいとたふときをしへにて、わが師の、よにすぐれ給へる一つなり。大かた古をかんがふること、さらにひとり二人の力もて、こと〴〵くあきらめつくすべくもあらず。又よき人の説ならむからに、多くの中には、誤もなどかなからむ。必ずわろき事もまじらではえあらず。そのおのが心には、今はいにしへのこゝろ、こと〴〵く明らかなり、これをおきては、あるべくもあらずと思ひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよきかんがへもいでくるわざなり。あまたの手を經るまに〳〵、さき〴〵の考へのうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎ〳〵にくはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、かならずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきを

いはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道には、いふかひなきわざなり。又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その說にまどひて、長くよきをしる期なし。師の說なりとして、わろきをしりながら、いはずつゝみかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみたふとみて、道をば思はざるなり。宣長は、道をたふとみ古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古の意のあきらかならむことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけむことをば、えしもかへりみざることあるを、なほわろしと、そしらむ人はそしりてよ。そはせむかたなし。われは人にそしられじ、よき人にならむとて、道をまげ、古の意をまげて、さてあるわざは、えせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師

をたふとむにもあるべくや。そはいかにもあれ。

一七　前後と說のかはる事

同じ人の說の、こゝとかしことゆきちがひて、ひとしからざるは、いづれによるべきぞと、まどはしくて、大かた其の人の說、すべてうきたるこゝちのせらるゝ。そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。はじめより終まで說のかはれることなきは、中々にをかしからぬかたもあるぞかし。はじめに定めおきつることの、ほどへて後に、又ことなるよき考の出で來るは、つねにあることなれば、はじめとかはれることあるこそよけれ。年をへて、がくもんすゝみゆけば、說は必ずかはらでかなはず。又おのがはじめの誤を、後にしりながらは、つゝみかくさで、きよく改めたるも、いとよ

き事なり。殊にわが古學びの道は、近きほどよりひらけそめつることなれば、すみやかにことゞくは考へつくすべきにあらず。人をへ年をへてこそ、つぎ〳〵に明らかには成りゆくべきわざなれば、一人のときごとの中にも、さきなると後なると異なることは、もとよりあらではえあらぬわざなり。そは一人の生のかぎりのほどにも、つぎ〳〵明らかになりゆくなり。されば、そのさきのと後のとの中には、後の方をぞ、その人のさだまれる説とはすべかりける。但し又みづからこそ、はじめのをばわろしと思ひて、改めつれ、又のちに人の見るには、なほはじめのかたよろしくて、後のは中中にわろきもなきにあらざれば、とにかくにえらびは、見む人のこころになむ。

一八　あらたにいひ出でたる説

大かたよのつねにことなる、新しき説をおこすときには、よきあしきをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者ににくまれそしらるゝものなり。あるはおのがもとよりより來つる説と、いたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるにすててとりあげざる者もあり。あるは心のうちには、げにと思ふふしもおほくあるものから、さすがに近き人のことにしたがはむことのねたくて、よしともあしともいはで、たゞうけぬかほして過ぐすたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、その中の疵をあながちにもとめ出でて、すべてをいひけたむとかまふる者も有り。大かた、古き説は、十がなかに七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、力のかぎりたす

け用ひむとし、新しきは、十に八つ九つよくても、一つ二つのわろきことをいひたてて、八つ九つのよきことをも、おしけちて、ちからのかぎりは、我も用ひず、人にももちひさせじとする、こは大かたの學者のならひなり。然れども又まれ〳〵には、新なる説のよきを聞きては、ふるきがあしきことをさとりて、すみやかに改めしたがふたぐひも、なきにはあらず。ふるきをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながら、さてあるなどは、あらたなるよき説をきゝては、かくてこそはと、いみじくよろこびつゝ、たちまちにしたがふたぐひも有りかし。大かた新なる説は、いかによくても、すみやかには用ふる人まれなるものなれど、よきは、年をへても、おのづから、つひには世の人のしたがふものにて、あまねく用ひらるれば、その時にいたりては、はじ

めにねたみそしりしともがらも、心には悔しく思へど、おくればせにしたがはむも、なほねたく、人わろくおぼえて、こゝろよからずながら、ふるきをまもりてやむともがらも多かり。しか世の中の論さだまりて、皆人のしたがふ世になりては、始よりすみやかに改めしたがひつる人は、かしこく心さとくおもはれ、ふるきにかゝづらひて、とかくとゞこほれる人は、心おぞく、いふかひなく思はるゝわざぞかし。

一九　あらたなる説を出す事

ちかき世、學問の道ひらけて、大かた萬づのとりまかなひ、さとくかしこくなりぬるから、とり〳〵にあらたなる説を出す人おほく、その説よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、い

まだよくもとゝのはぬほどより、われおとらじと、よにことなるめづらしき說を出して、人の耳をおどろかすこと、今の世のならひなり。その中にはずゐぶんによろしきことも、まれには出でくめれど、大かたいまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらむ勝たむの心にて、かろ〳〵しく、まへしりへをもよく考へ合はさず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはなか〳〵なるいみじきひがごとのみなり。すべて新なる說を出すは、いと大事なり。いくたびもかへさひおもひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふ所なく、うごくまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、ほどへて後に、いま一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

折たく柴の記

新井白石が、自家の經歷及び雜感を記したもの。白石は江戸の人。父は上總の久留里侯土屋利直に仕へた。白石の家は貧にして、幼時苦學し、概ね獨學を以て經史百家の書に通じた。後に德川家宣の甲府邸に召され、家宣が將軍となるや、侍講として仕へ献替の功が多かつた。享保十年歿、六十九歲。

一　父の面影

我が父のわかくおはせしほどは、戰國の時をさる事遠からず。世の人遊俠を事として、氣節を尙ぶならはし、今の時には異なる事ども多く聞えたりけり。我が父にておはせし人も、東走西奔、その蹤跡さだまれる事もなくして、年を經給ひしうちに、三十一歲の時に、民部少輔源利直の家に出で仕へられし初に、走の侍の夜討したり

源利直　土屋氏　上總久留里の藩主

走の侍　徒歩の士

戸部　民部省の唐名、土屋利直のこと

と聞えしもの三人ありて、めしとらへて、門のやぐらの上におしこめしを、我が父一人にあづけらる。此のよしを承りて、「彼の輩を某にあづけられ候はむには、さだめて刀・脇ざしをば、とられずこそ候はんずれ」と申さる。「申すところ聞し召されぬ」とて、かれらが刀・脇ざしをば、我が父にて候ひし人に給うたりけり。それをもたせて、やぐらの上に登りて、三人のものに返しあたへて「わぬしら、にげてゆかむと思はば、我が頸きりてゆけ。我一人、わぬしら三人に敵すべきにあらず。さらば、みづからの刀・脇ざし、不用のものなり」とて、三尺手拭にて、つがね結びてなげすて、かれらと同じく起き臥し、もの食ひてありしが、日十日ばかりが後に、かれらが夜討せしと聞えしは、あらぬ事たるよし、さだまりしかど、「かゝるものめしつかふべきにあらず」とて、戸部の家をば出されたり。

其の時に及びて、彼等我が父にいひしは、「我等いかにいひがひなきものぞと思ひ給ひぬれば、たゞ一人にめしあづけられたりけむ。思ひしらせ参らせんものをと思ひしかど、わぬしが刀・脇ざしをだに帯せずしてあるを殺したらむには、はたしていひがひなしと思ひ給はん事のくやしければ、此のまゝに死しなむは力なし、幸に命いきたらましかば、其の時にこそ恨をば報いんずるやうありと思ひしに、わぬしがなさけによりて、刀・脇ざし取りはなされずして、ふたゝび武士の中にたちまじるべき身ともなりぬ。此なさけわするべからずと思へば、今は恨もはれし心地するなり」といひて、わか

新井白石

れしと語り給ひき。

我が父致仕の後、事にふれてのたまひたりしには、蘆澤といひしものは幼き時に父におくれしを、その父の遺領給うて、近くめしつかはれしに、それが廿歳ばかりに及びし頃に、我を召す事ありて参りしに、戸部は物に腰かけて、打刀を横たへておはします。その氣色、常にかはりぬと思ひしに、「近くまゐれ」とありしかば、腰刀をとりて参らむとせしに、「そのまゝに参れ」とありしによりて、近く参りしに、「たゞ今蘆澤を召出して、手づから誅すべし。それにさぶらふべし」とのたまひ出したり。答へ申す事もなくてありしに、やゝありて、「いらへ申す事もなきは、思ふ所やある」と仰せられしほどに、「さん候。かれがつねゝ申し候ひしは、『いとけなき時に、父におくれし身の、莫大の主恩によりて、かくまでは生長しぬ。此の恩に報いまゐらせぬ事、よのつねの人々の如くしてはかなふべからず』と申す。天性不敵なるものの、しかも年なほ若くして、をこのふるまひも多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらむ。但しわかく候時に、かれらがごとくなるものにあらずしては、年たけ候ひし後に、もののの用にはたゝぬもの多く候か。これらの事を存じめぐらし候につきて、御答の遲く候ひしは、恐れ思ふ所に候」と申す。またのたまひ出す事もなく、我もまた申す事もなくしてさぶらふほどに、やありて、面に蚊の集りぬるに、「逐ふべし」とのたまひしほどに、顏を動かしければ、血に飽いて、胡頽子のごとくになりし蚊の、六ツ七ツはら〳〵と地に墜ちしを、懷の紙をとり出して、つゝみて袖にしてさぶらふ。またやゝありて、「罷り歸りて休み候へ」とのたまひしかば退出す。かの男は常に酒を好みて、醉ひみだれぬる事ども有り

しかば、關といひし人の、それにしたしかりしをかたらひて、二人してまづ酒を斷たしめて、常にいさめし事どもおこたらず。かくて年月經しのちに、つひに父の職をも仰せ蒙りたりき。今は戸部もうせ給ひぬれど、はじめ、我が申せしことばの、むなしからざるやうにつかへまゐらせよと思ふなりと、のたまひたりき。これは、かの人久しくして、また酬酒の事ありしが故なり。

二　我が身の修業

我が幼き頃は、上野物語といふ草紙ありけり。これは寛永寺の花見に、人のむれ來る事共をしるせしなり。我が三歳たりし春の頃にやあるべき、火燵に足をさして、はらばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙をもとめて、すきうつしけるを、母にておはせし人の見給ひ、

寛永寺　今東京市下谷區上野公園にある

十が中一二は、まことの文字もあるを、我が父に見せまゐらせしを、父のともなる人の來り見しより、人々も聞き傳へて、そのうつせしものどもを、とり傳ふる事になりたり。

我が十六七歳の時、上總の國にゆきしに、かしこにてそのうつせしものを見る事を得たりき。又其のころ屏風に我が名を題せしに、二字は其の體をなしたるものの後までありしが、火にやけうせたりければ、今はその節のものは、我がもとにはのこらず。

此の後は常の戯れに筆とりて物かく事のみ習ひければ、おのづから日々に文字を見しりたれど、物よむ師などとすべき人なかりしかば、たゞ往來ものの類などをよみならふのみなりき。

戸部の家人に富田とて、生國は加賀の國の人と聞えしが、太平記の評判といふ書を傳へて、其の事を講ずるあり。夜々に我が父など

太平記の評判　下野守和田助則といふ人の著

寄合ひつゝ、其の事を講ぜしめらる。我四五歳の時に、つねに其の座に侍りてこれをきくに、夜いたくふけぬれど、つひに坐をさりし事もなく、講畢りぬれば、其の義を請ひ問ふ事などありしを、人々奇特の事なりといひき。

六歳の夏の頃、上松といひし人の、すこしく文字などありしが、七言絶句の詩一首をしへて、其の意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首までをしへられしをば、人にも講じ聞かせたりき。「此の兒文才あり、いかにも師をえらびて、學ばしめらるべし」など、彼の人もいひしかど、かたくなるむかし人たちのいひしは、「むかしよりいひ傳へし事あり。利根・氣根・黄金の三こんなくしては、學匠になりがたしといふなり。此の兒利根こそうまれつきたらめ、なほいとけなくして、その氣根の事もはかりがたく、家富めりとも見え

ねば、黄金の事心得られず」などいひあへりしに、我が父も、戸部の御いつくしみによりて、つねにかたはらをはなれまゐらせず、學に入れ、師にしたがはしめん事もかなふべからず。されどいとけなきより、物かく事をば、戸部も人々にかたりほこらせ給ひし事なれば、せめて物をばかき習はしめたくこそ侍れ」とて、我が八歳の秋、戸部の上總の國にゆき給ひしあとにて、手習ふ事ををしへしめらる。

其の冬の十二月半ば、戸部歸り參り給ひしかば、つねにかたはらにさぶらふ事もとの如く、明けの年の秋、また國にゆき給ひしあとにて、課をたてられて、日のうちには行草の字三千、夜に入りて、一千字を限りてかき出すべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだみたざるに、日暮んとする事たび〳〵にて、西向なる竹縁のある上に机をもち出でて、書き終りぬる事もありき。ま

た夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へがたきに、我につけられしものと、ひそかにはかりて、水二桶づつ、かの竹縁に汲みおかせて、いたくねぶりの催しぬれば、衣ぬぎすてて、一桶の水をかゝりて、衣うちきて習ふに、はじめひやゝかなるに目さむる心地すれど、しばし程經ぬれば、身あたゝかになりて、また〳〵眠くなりぬれば、又水をかゝる事さきの事の如くす。二たび水をかゝりぬるほどには、大やうは課をもみてたりき。これは九歳の秋冬の間の事なり。

かゝりしほどに、此の頃よりは我が父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くにはかきたり。十一歳の秋、また課をたてられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日のうちに淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事終へしかば、册になして戸部に見せまゐらす。ほめ給ふ事大かたならず。十三の時よりは、戸

庭訓往來
玄惠法師の作漢文めかしい文體で手紙の文例を書いたもの

部の人と贈答し給ふ程の文ども、大かたは我に命ぜられき。又十一歳の時に、我が父の友に關といひし人の子どもは、太刀打のわざにすぐれて、人にをしふる事ありしを、我にも此のわざ教へられん事を望みしに、「わぬし、いまだいとけなし。これらのわざ學ばむ事遲からず。」といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀つかふ事すこしも心得ざらむには、刀・脇ざし腰にせん事誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふ所、誠に然かなり。」とて、一つのわざを傳へて習はしめたり。かゝりしほどに、其の年十六になりし者の我と藝を試みむといひしかば、木刀を執りて三度あひて三度まで勝つことを得たりしにぞ、人々も亦興に入りて笑ひたりける。

そののちは、つねにかゝる武藝の事どもを好みて、手習ふことなど心にも染めずありしかど、物よむ事をば好みければ、つねに我が國

翁問答
中江藤樹の著

小學
小學は支那宋代の學者朱熹の著

程子の四箴
支那宋代の學者程顥の書いた視箴・聽箴・言箴・動箴

韻會・字彙
漢字の字書

の物がたり・草紙等の類をば見ずといふ者もなかりき。十七歳の時に至りて、同じやうにめしつかはれし若侍のもとにゆきしに、案の上に書あるを見れば、翁問答と題せしものなり。いかなる事をやしるしぬらむと思ひて、借ることを得て、家に携へ歸りて見けるにこそ、初めて聖人の道といふものある事をばしりけれ。これより道にこゝろざし切なりけれど、師とすべき人もあらず。京の人にて、醫を業とし、すこしく學問あるが、戸部の許に日々來れるあり。此の人にむかひてこゝろざしのほどを語りしに、小學の題辭を講じきかせられたり。そののち又程子の四箴をも講じきかせられしより、やがて小學の書を日夜に誦し習ひて、業すでに畢りぬれば、四書を誦し習ひ、そのちまた五經をも誦し習ひたれど、これら皆句讀を授けし師あるにもあらず、みづから韻會・字彙等の書によ

豫州
藩主土屋頼直利直の子

りて、誦し習ひければ、後に思ふに、ひがごとのみぞ多かりける。文學の拙くして、字義を解する事の難きにくるしみて、學びのいとまあるをり〳〵には、文章詩賦の類をも學びしほどに、その年の十二月の頃、冬景即事を七言律詩に賦しなしたり。これ我が詩作れる事の始なり。ある人の其の詩を評しける事あるを聞きて、やがて其の嘲を解く文一篇作りたりけり。これ文作れる事の始なり。されどいとけなかりし時、我が父の友とし給ひし人も、また我が父の仰せられし事もあれば、學文の事をば、父には深くしのびまゐらせたりしかど、書籍等求め得べきやうなければ、母にておはせし人には、我がこゝろざしのほどを聞えまゐらす。

かくて廿一歳の時に至りて、豫州の家を去りしかば、此の時に及びてこそ、同じ志の人々をあひ知りて、ものまなぶ事をも得たれ。さ

阿比留
西山順泰

三學士
次に記す三人の學者

恭靖木先生
木下順庵

公
將軍家、時に五代綱吉

れど思ふ所あれば、師をもとむるには及ばず。此の頃よりぞ、對馬の國の儒生、阿比留といひし人をば相識りける。廿六の春、ふたゝび出でてつかふる身となりぬ。ことしの秋、朝鮮の聘使來れり。かの阿比留によりて、平生の詩百首を錄して、三學士の評を乞ひしに、其の人を見てのちに序作るべし」といふ事にて、九月一日に客館におもむきて、製述官成琬、書記官李聃齡、ならびに裨將洪世泰などいふものどもにあひて、詩作りし事などありし。其の夜に、成琬、我が詩集に序つくりて贈りたり。

この年恭靖木先生も、公にめし出され給ひ、かの阿比留彼の門に入りてものまなぶ。そののち我出羽の國山形といふ所にゆく事ありし時、紀行一卷あり。貞享三年丙寅の秋、我三十歳の時の事なり。阿比留其の卷をもて、木先生に見せまゐらせ、朝鮮の人の序の事な

文昭廟
六代將軍家宣
初め甲府藩主

ど申せしかば、「あはれその人をあひ見ばや」とのたまひぬとて、阿比留が媒して、はじめて木先生に見えまゐらせし事あり。そののち彼の阿比留病して死せんとする時に、我をして先生の碑文を望み申して、我をして書かしめたりき。これらの事によりて、我も彼の門に出で入る事の年を經しほどに、まさしく束脩の禮を執るにも及ばで、したしき師弟とはなりたるなり。されば彼の門に年久しき高弟も多かれど、我をば常に其の座の上につかしめられ、つひには文昭廟の藩邸におはしませし時に、薦舉せられしには至りたりけり。

今これらの事共を思ふに、むかし我三歳なりし時より、物かく事をしれる初に、しかるべき師といふものありなむには、かく書に拙き身にもあらじ。また六才の時より、詩を誦し習ひし事などありし

時より、したがひ學ぶ所もありなば、文字の事も、すこしくすゝむ事もありなまし。 まして十七の時より、斯道にこゝろざせしときより、をしへみちびく人もありなむには、今の我にもあらじ。 我が藩邸に仕へまゐらせし後に至りてこそ、自らも書籍をもとめ、賜はりし所も多くはなりたれ。 されど身すでにつかへにしたがひしかば、書を觀るべきいとまも多からず。 是より先には、身つねに貧しくして、しかるべき書どもをば、人に借りもとめて見もし、また記しおくべきものどもをば、手づからうつせしほどに我が見たりし書とても多からず。 されば學文の道において、不幸なる事のみ多かりし事、我にしくものあるべからず。 かほどまでにも學びなせし事は、前にもしるせし事の如く、つねに堪へがたき事に堪ふべき事をのみ事として、世の人の一たびし給ふ事をば十たびし、十たびし

癸未の年
元祿十六年、白石時に四十七歳

殿
櫻田なる甲府侯の藩邸

給ふ事をば百たびせしによれるなり。

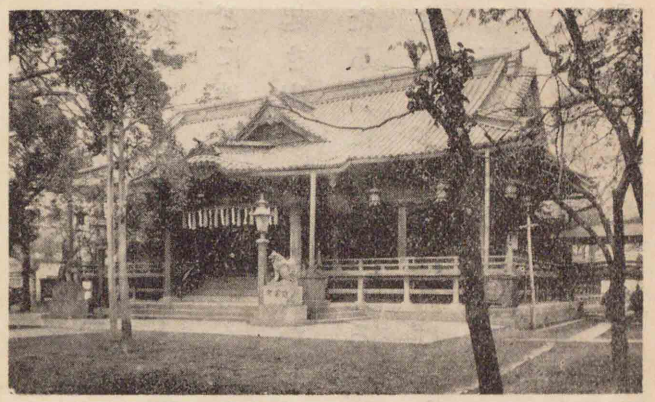
三　元祿の地震

我はじめ湯島に住みし頃、癸未（ミヅノトヒツジ）の年、十一月廿二日の夜半過ぐるほどに、地おびたゞしく震ひ、始めて目さめぬれば、腰の物どもとりて起き出づるに、こゝかしこの戸障子みな倒れぬ。 妻子どものふしたる所にゆきて見るに、皆々起き出でたり。 屋のうしろの方は、高き岸の下に近ければ、みな〳〵引具して、東の大庭に出づ。 地裂くる事もこそあれとて、たふれし戸ども出しならべて、其の上に居らしめ、やがて新しき衣にあらため、裏うちたる上下の上に道服きて、「我は殿に參るなり。 召供のもの二三人ばかり來れ。 其の餘は家にとゞまれ。」といひてはせ出づ。 道にて息きれん事もあらめと思

神田明神
今東京市神田區にある

ひしかば、家は小船の大きなる浪にうごくがごとくなるうちに入りて、藥器たづね出して、かたはらに置きつゝ、衣改め着るほどに、かの藥のことをばうちわすれて走せ出でしこそ、恥かしき事におぼゆれ。

かくて走する程に、神田の明神の東門の下に及びし頃に、地またおびたゞしくふるふ。こゝらの商人（アキビト）の家は皆々打あけて、おほくの人の、小路にあつまり居しが、家のうちに燈の見えしかば、「火こそ出づべけれ。燈うちけすべきものをこそ」と、いひつゝ走りてゆく。



神田明神（大正大震災燒失前）

昌平橋
今萬世橋と聖橋との間にある

景衡
朝倉餘一といつた人である由

神田橋
今神田區から麴町區大手町に行く大通りにある

昌平橋のこなたにて、景衡の、我が方に走せ來るに、ゆきあひて、「あとの事、よきにはからひ給へ」と、いひすててゆく。橋をわたりて南にゆきて、西に折れて、また南せんとする所に、馬をたてて、あるものを、月の光にみれば、藤枝若狹守なり。これは地の裂けて、水の涌き出づれば、其の深さ廣さのはかりがたさに、かくてありしなるべし。「つゞけや、ものども」といひて、一丈餘になりて流るゝ水の上をはねこえしに、供なるものども同じくこえぬ。その水こえし時、足をうるほしければ、草履の重くなりて、ゆきがたかりしかば、あらためはきて走するほどに、神田橋のこなたに至りぬれば、地またおびたゞしく震ふ。おほくの箸を折るごとく、また蚊の集り鳴くごとくなる音のきこゆるは、家々のたふれて、人のさけぶ聲なるべし。石垣の石走り、土崩れ、塵起りて空を蔽ふ。かくては橋も落ちぬべしと

日比谷
今麹町區

思ひしに、橋と臺との間、三四尺許くづれしかば、跳りこえて門に入りしに、家々の腰板のはなれて大路に横たはれるが、長き帛の、風に飜りしがごとし。龍の口に至りて、遙に望みしに、藩邸に火起れり。その光の高からぬは、殿屋たふれて、火出でしにやと、いと覺束なくて、心はさきに走すれど、足はたゞ一所にあるやうに覺ゆ。こゝより四五町がほど、ゆきしと思ふ頃に、馬の足音の後の方にするを、かへり見れば、藤枝の馳せ來るなり。我こゝまでは來たれど、ゆく末の事はかりがたければ、「若狹守殿とこそ見まゐらすれ。あの火のありさま覺束なく侍るものかな」といひしかば、「されば候。來らせ給へ。馬上に候。御ゆるしかうぶらむ」といひて馳せゆく。やがて日比谷の門に至るに、番屋たふれ、壓されて死するものの、くるしげなる聲すなり。かしこに又馬よりおりたちて、居しものを

見るに、藤枝なり。これは樓門の瓦の、南北の檐より、地に落ちかさなりて山のごとくになりたれば、こえがたきによれるなり。「いざたゝせ給へ」といひて、伴なひて、その上をこえすぎて、小門を出で見れば、藩邸の北にある長屋のたふれて、火出しにて、殿屋には、はるかに隔りたれば胸ひらけし心地す。藩邸の西の大門ひらけて、遠侍のたふれし見ゆ。藤枝こゝより入らむとす。某は常に西の掖門より參りぬれば、「かしこより入り候はむ」といひてわかれぬ。かくして掖門より入りて見るに、家々皆たふれかたぶきたれば、出でたちてある人に、路ふさがりてゆくべからず。そこをすぎて、常に參る所に至りたれば、其所もたふれて入るべからず。藤枝またそのほとりにたゝずみ居しを伴なひて、御納戸の口といふ所より入りたり。こゝかしこの天井落ちかゝりし所をすぎて、我は常に祇候

詮房朝臣
間部氏

する所に參りしに、今の越前守、詮房朝臣の、こなたの方に來るにゆきあひて、御つゝがもあらせ給はぬ事を聞き、「かゝる時に候へば、推參し候」といひすてて、常の御座所に參るに、その庇の內に、東の屋のたふれかゝりしあり。近習の人々は、南の庭上にたち居たり。

「上にはあなたの庭におはします なり。」といふ。戸田・小出・井上などのおとなたちも、こゝに入り來る時は、庭上にたちぬれば、五十嵐といひし人に、いひ語らひて、御庇に敷かれしたゝみ十帖ばかり、庭上におろして、皆々を其の上に座せしむ。地震ふ事しきりなれば、座せしうしろの池の岸くづれ〳〵て、平かなる地も狹くなれり。かゝりし程に酒井左衞門尉眞忠、仰をかうぶれりとて入り來りて火を防ぐ。火熾りならんには、御座を移さるべしなど聞ゆるに、御袴ばかりに、御道服めされて、常の御所の南面に出でたゝせ給ひ、某

がさぶらふを御覽じて召す。御緣に參りしかば、地震の事つぶさに問はせ給ひて、後に奧に入らせ給ひぬ。

夜も明けぬべき頃に至りて、おほやけに參り給はむと聞ゆ。某長門守の耳につきて、「地震ふ事なほしきりなり。參らせ給はむ事いかにや」といひしに、「我もさこそはおもへど、とゞめ申すべき事にあらず」といふほどに、出でたゝせ給ひたり。

かくてかの火出でしところにゆきて見るに、たふれし家に壓され死せしものどもを、引出したるが、こゝかしこにありし、井泉ことごとく竭きて水なければ、火消すべきやうもあらず。かゝりし程に、いまの隱岐守、藤原詮衡の、我をいざなひて、兄の詮房朝臣の家の庭に入りて膳を薦む。よべ侍醫の坂本といひし人の、庭上に來りて、我を引きのけて、袖より物出して與ふ。湯にひたしたる飯を、茶碗

に盛りしなりき。それを食ひしのち、程へしかば、飯うちくひ、酒うちのみて出づ。今の市正藤正直の家の前をすぐるに、よび入れて茶をあたへたり。かくせしほどに、歸らせ給ふと聞きて、入らせ給ふべき所にゆきむかひて、むかへまゐらす。そとより、おとなたちと我と四人うちつれて、いづこにやありけん、細き渡殿のある所を經て、常の御座の方にゆくに、作りあはせの所に至る。人々は草履を袖にしたれど、戸田はその用意なしとみゆ。我はかゝる事もこそあれと思ひて、はじめ庭上に在りし時、そこらの草履を、左右の袖にしたれば、取出でて與ふ。かゝりしほどに、ふたゝびさきの所に出でさせ給ひ、某をめして、「我いとけなき時に、上野の花見しものどもの、むれゐしを見しに似つるかな」と仰せられて笑はせ給ひぬ。とかくせしほどに、火も打消えぬ。日すでに午の半にもなりぬべ

き頃、又出でさせ給ひて、某をめす。參りしかば「妻子どもの事、そのの事、聞えしにや」と仰あり。「よべ參りし後に、こゝにのみさぶらひて、それらの事も承らず」と申す。「我谷中の別業にゆく時に、人のをしへたりしをおもふに、居所は高き岸の下にありしとこそ覺ゆれ」と仰せらる。「さん候」と申す。「いよ〳〵覺束なき事なり。かくては、地ふるふ事數日をも經め。ふるひし初の事のごとくならむには、あひかまへて來るべからず。とく〳〵家に歸るべし」と仰せ下されしかば、罷り出でて、召供のものにたづねあひて、「よべのまにさぶらひしにや」と問ふに、「けさとく家にのこせしものどもの來り代りぬれば、家に歸りて物くひてまた參れり」といふ。これによりて、妻子どもの事、つゝがなかりし事をしりぬ。心しづかに家に歸りぬれば、未の初にはすぎぬ。

明けの日、藩邸に參りしに、殿屋ことゞく傾きたれば、東の馬場に假屋うたせ給ひておはします。地なほしきりにふるひぬれば、必ず火起りぬべしともおもふに、我がぬりごめのかたぶくまではなけれど、壁の所々くづれ落ちしあまた有れば、くづれしつち水にひたして、そのやぶれを修め塗らしむ。おもひし事のごとくに、同じき廿九日の夜に入りて火起れり。資財ことゞくぬりごめにおさめしかど、思ふに、地ふるふ事やまず、ぬりごめたふれん事もはかるべからず。また修め塗りし所の土、いまだ乾かず、火勢さかりにして、新舊の土の間ひらけなば、内に火の入らむ事も、はかりがたければ、やがてそのほとりの地に坑掘らせて、賜はりし所の書ども、また手づから抄錄せしものども、ぬりごめよりとり出して、かの坑の中にいれ、疊六七帖その上にならべ置く。土厚くきりかけて、家を

出づ。こゝかしこにて、火のために道を遮られて、火勢やゝ衰へし時に、その燒けすぎしあとの道を經て、家に歸りて見るに、かの書を埋みし坑に近き岸の上なる家のやけ落ちたるが、火いまだ消えずぞありける。しきりに水をそゝぎて、火を打消して、やけたる柱などとりのけて見しに、其の家の落ちぬる時に、かの埋みし所の土をばうち散らして、上にかさねし疊の燒けうせ、下なる疊に火すでにつきし程に歸り來りけるなり。ぬりごめは思ひしに似ず、倒れもせず、やけもうせず、さらばはじめ坑うがち書おさめし事は、徒に力を勞せしなりけりといひて笑ひぬ。

日本永代藏

井原西鶴の著した浮世草子の一。全六卷。町人の處世の心得を骨子とせる小話集である。西鶴は大阪の人。初め西山宗因の門に入り俳諧を以て世に立つたが、四十一歳以後專ら浮世草子の作者として一生を終へた。元祿六年歿、五十二歳。

一　怪我の冬神鳴

細波や近江の湖に沈めても、一升入る壺は其の通りなり。大津の町に醬油屋の喜平次といふ者有りけり。此の所は北國の舟着き、殊更東海道の繁昌、馬次ぎ・かへ駕籠・車を轟かし、人足の働き、蛇の酢・鬼の角細工、何をしたればとて賣れまじき事にあらず。近年問屋町、長者のごとく、屋造り昔にかはり、その華奢かぎりもなく、天秤のひゞきわたり、金銀も有る所には瓦石のごとし。身代程高下の有

る物はなしと、喜平次荷桶おろして無常觀じける。我が商に廻れるさきぐにも、世は愁喜貧福のわかち有りて、さりとは思ふまゝならず。かしこき人は素紙子きて、愚かなる人はよき絹を身に累ねし。兎角一仕合は分別の外ぞかし。然れども其の身働かずして、錢が一文天から降らず、地から湧かず、正直にかまへた分にも埒は明かず、身に應じたる商賣をおろそかにせじと、一日暮しを樂みける。

井原西鶴並に筆蹟

關寺　大津町端にあつた寺
神農　支那古代の聖人、藥草を研究して諸人を救療した故、漢方醫で之を祀る
四の宮　近江志賀郡にある神社
高觀音　三井寺の境内の觀世音堂

關寺のほとりに森山玄好といへる人、かたのごとく藥師は上手殊に老功なれども、比叡の山風程の事にもかつて藥まはらず、門に「もの、もう」の聲絶えて、内に神農の掛繪も身ぶるひして、萬づの紙袋の書付ほこりに埋もれ、冬も羽二重のひとへ羽織せんじやうつねにかはらぬ衣裝つき、醫師も藝人の身に同じ、呼ばぬ所へはゆかれず宿に居れば外聞あしく、毎日朝脈の時分より立出でて、四の宮の繪馬をながめ、又は高觀音の舞臺に行きて、近江八景もあさゆふ見てはおもしろからず、身すぎはかけて隙の有る程氣の毒なる者はなし。人には繪馬醫者といはれ、口をしかりし。有る人取立て碁會の宿して、一番に三錢づつ茶の代とりて、やう〳〵死なぬを德にして世をおくる人もあり。又馬屋町といふ所に、坂本屋仁兵衛殿として以前は大商人なりしが、大分の銀をなくなし、殘る物とて家藏賣

りて、二十八貫目ありしを取つて退き、其の後三十四五度も商賣かへられしうちに、今は殘らず喰ひ込みて何をすべきたよりもなく、むかしの厚鬢もうすく、仁躰をかしげなれば、ちつとも埒のあかぬ男、貧乏神の社人になれとて、一門中これを見かぎる。されども母親の隱居銀十貫目あるを、ひとりの子なればふびんにもおもはれ、せめてはこれをとらせ、世にすむ種ともなれかし、然れ共仁兵衛に渡しては一年もあるまじ。姉聟にあづけて月に八十目づつ利銀わたし、此の有り切りに五人口過ぎよ。といはれし。先づ夫婦、子が一人、弟に仁三郎とて背僂病、ひとりは乳のませし姥が足たゝずして、外にたのむ島もなく此處にかゝり舟、日和を見てもどれを一人出て行けといふものもなし。さりとては十貫目の利銀にて八十目取り、五人口は過ぎがたし。此の銀は朔日に請取り、五匁の屋賃

松本
大津の東部

ぬけ參り
家を無斷で出て參宮するもの

池の側
池の側針は大津の名產

をのけて置き、白米のよきに味噌・醬油・鹽・薪をとゝのへ、常住香の物菜、其の外にはいかな〳〵三月の鯛を一枚、松茸一斤二分する時も目に見るばかり、咽がかはけば白湯に焦穀、油火も眞中にひとつともして、これを寐ざまに消して鼠のあるゝをかまはず。盆・正月の着物もせず。年中始末に身をかため、慰みには觀世紙縷をして、明暮不自由なる世や。あきなひの道しるとて、百目にたらぬかねにて、七八人樂々と年こすもあり。又松本の町に後家有り、獨り娘に黄唐茶のふり袖に菅笠を着せて、言葉すこしなまりならひ「ぬけ參りの者に御合力」と、此の十二三年も同じ僞にて世を過ぐる女もあり。又池の側の針屋、ほそき事なれども、娘を京へ緣組を聞き立て、銀二千枚付けるとて仲人かゝがとびまはり「しひたら百貫目は付けてやらるべし」と私語きし。人の內證はしれぬ物、此の大津のう

若えびす
京都で正月元日に賣りあるいた鞍馬の毘沙門天や惠比須神のお札

一跡
いちどき

ちにもさま〳〵ありと、醬油賣りまはるさき〳〵にて見聞き、喜平次が宿にかへりて語りける。

此の女房ずゐぶんかしこく、子供も奇麗にそだて、人の物をもおはず、年とり物をも師走のはじめ頃より調へ、節季に帳かたげた男の顏を見ぬを嬉しやとて萬事をしまひけるに、此の幾年か錢とりあつめて七匁五分か八匁、七匁六分、八匁八九分か殘り、つひに十匁ともちて年越えたる事なく、板木でおしたるやうな此の家の若えびすといはひけるに、瓦落々々と空さだめなや、冬神鳴十二月廿九日の夜の明けがたにおちかゝりて、一跡に一つの鍋釜、微塵粉灰にくだかれ、これを嘆くにかひなく、片時もなければならず買ひもとめしに、其のとしの暮にそれ程たらずして、五匁廿四五所に買ひがかり、やかましき事を聞きぬ。これをおもふに當所のかならず違ふ

判金（ハンキン）　大判、七兩二分にあたる
上米（ウハマイ）　手數料、こゝでは入港税
運上　運送上納、船舶の航行税
問丸　問屋

ものは世の中、我も神鳴の落ちぬまでは世にこはき物はなかりしにと悔みぬ。（卷二）

二　茶の十徳も一度に皆

越前の國敦賀の港は毎日入舟、判金一枚ならしの上米ありといへり。淀の川舟の運上にかはらず、萬事の問丸繁昌の所なり。殊更秋は立ちつゞく市の借屋、目前の京の町、男まじりの女尋常に、其の形氣（カタギ）北國の都ぞかし。旅芝居も此處を心がけ、巾着切も集れば、今時の人かしこく印籠はじめからさげず、鼻紙袋も内懐に入れしは手のとゞくことに非ず。この中にても錢を一文只はとられず、盗人仲間もむつかしの世や。兎角正直の頭をさげて、當座の旦那あひしらひに物買をまねき、商上手の者は世を渡りかねず。

町はづれに小橋の利助とて妻子も持たず、口一つを其の日過ぎにして才覺男、荷ひ茶屋しほらしく拵へ、其の身は玉だすきをあげて、くゝり袴利根に、烏帽子をかしげに被き、人より早く市町に出、「ゑびすの朝茶」といへば、商人の移り氣、咽のかわかぬ人までも、此の茶を呑みて大かた十二文づつ投げ入れられ、日毎の仕合、程なく元手出（デ）來（カ）して、葉茶見せを手廣く、其の後はあまたの手代を抱へ、大問屋となれり。

これまでは我が働きにて分限になり、人のほめ草なびき、歴々の乞聟にも願ひしに、一萬兩より内にて女房をよばず、四十まではおそからずと、當分の物入を算用して、銀の溜るを慰みに淋しく年月を送りぬ。

それより道ならぬ惡心發りて、越中・越後に若い者をつかはし、捨（スタ）り

行く茶の煮殼買ひ集め、京の染物に入る事と申しなし、呑茶にこれを入れまぜて、人知れずこれを商賣しければ、一度は利を得て家榮えしに、天これを咎め給ふにや、此の利助俄に亂心となりて、我と身の事を國中に觸れまはり、「茶殼茶殼」と口をたゝけば、「偖はあの分限、さもしき心底なり」と人の付合ひ絶えて、醫師を呼べど行く人無く、おのづから次第弱りに湯水のかよひ絶えて、既に末期におもむき、「我今生の思ひ晴らしに茶を一口」と涙をこぼす。目に見せても咽に因果の關すわりて、息も引き入る時、内藏の金子取出させて跡や枕にならべ、「わが死んだらば、此の金銀誰が物になるべし。思へば惜しや悲しや」と、しがみ付き、涙に紅の筋引いて、顏つきはさながら角なき青鬼の如し。面影屋内を飛びめぐりて落ち入るを、押し付くればよみがへりして、銀を尋ぬること三十四五度に及べり。

かたし 片方

後には下々も愛想つきて物すごく、病家に行く人もなく、やう〳〵臺所に大勢集まり、棒・乳切木を手毎に持ちて身用心をして、二三日も音のせぬ時、あまた立ちかさなりて見しに、金銀に取り付き眼を開きし有樣、人皆魂無かりき。そのまゝ乘物におし込み野墓に送りける。

折ふし春の日の長閑なるに、俄に黑雲立ちまよひ、車軸平地に川を流し、風、枯木の枝折りて、天火ひかり落ちて、利助がなきがらを煙になさぬ先に取りてや行きけん、明乘物ばかり殘りて眼前に火宅のくるしみ、おの〳〵にげ歸りて皆菩提心にぞ成りにける。

その後利助が跡に遠き親類を招きこれを渡すに、聞き傳へて身をふるはし、箸をかたし取る人なし。下人共に配分して取れといへど、更に望なしとて、此の家にて仕著せの布子まで置いて出づれば、

欲でかためし人もおろかなる物ぞかし。せんかたなくて諸事賣拂ひ、殘らず檀那寺にあげしに、思ひの外の仕合、住持がよろこびとなれり。利助果てて後、所々の問屋をめぐり、年々の賣掛を取るこそ不思議なれ。死に失せしとは知りながら、昔の形に恐れて輕目なしに掛けて濟ましける。此の事沙汰して、利助が住める家居を、化物屋敷とて人只も貰はず、崩るゝまゝに荒れける。これらを見るに付け、たとへば利を得るにして、工みて置き捨ての質物、萬の似せ物、寺々の祠堂銀を借り集め、分散にて濟まし、博奕仲間、山賣、人參のつき付け、犬釣など、いかに身過ぎなればとて人外なる手業する事、適〻生を受けて世を送れるかひなし。其の身にそまりてはいかなる惡事も見えぬものなり。いと口をしき事なれば、世間にかはらぬ世を渡るこそ人間なれ。これを思ふに夢にして五十年の内

檀那ノ財物ヲ施ス人　菩提寺

輕目なしに　昔は金銀貨を一々目にかけて仕拂つた

つき付け　押賣

外、何して暮せばとて成るまじき事には非ず。（卷四）

駿臺雜話　室鳩巣の隨筆。鳩巣は名を直清といふ。幕府の儒官。白石の薦によつて將軍家宣に仕ふ。享保十九年歿、七十七歳。

楊巨源　中唐の詩人

手折りし枝をしたふ春風

盛衰、榮枯は世の常なり。それによつて志を變へぬは、これ士の常なり。若し時の模樣につきて覺悟を變じ、世話にいふ襟もとにつくやうにては、何をもて士と申し侍るべき。

水邊、楊柳綠烟絲
唯有春風最相惜
立馬煩君折一枝
慇懃更向手中吹

これ、唐の楊巨源が楊柳の詩なり。この三四の句意、婉にして面白

く覺え侍り。よりてその意を翁が詠める歌に、

なれて吹く名殘や惜しき青柳の
手折りし枝をしたふ春風

楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそにして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほその手折りし枝を去りやらで、惜みがほに吹くこそ、いとやさしく覺え侍れ。古より、忠臣義士の盛衰存亡をもて心を變へぬに譬へつべく候。

翁むかし源平盛衰記をよみて、源氏の士には渡部の瀧口競、平家の士には彌平兵衛宗清が事を感ぜしが、又東鑑にて伊東九郎祐清が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を撰び置きしが、いまだ稿を脫せざるうちに、池魚の災にかゝり、其の後再び草を起すこともなく打ち過ぎし程に、今は其の文をば跡もなく忘れ侍り。

源平盛衰記　四十八卷、源平戰亂のことを記した軍記　作者不詳
渡部の瀧口競　源頼政の臣
宗清　平氏、平頼盛の臣

東鑑　五十二卷、鎌倉幕府の記錄
伊東祐清　祐親の二男
池魚の災　「俗云。城門失レ火。殃及ニ池魚ニ。舊說。宋城門失レ火。自汲ニ池中之水ニ。而空ニ竭魚池ニ也。」（風俗通）
治承年中　安德天皇の治承四年四月
高倉宮　以仁王、後白河院の皇子
三井寺　近江國大津市の西北にある
六波羅　今の京都五條の東建仁寺の邊、宗盛の邸のあつた所

渡部競は、源三位入道頼政が所從の士には第一のものなり。然るに治承年中、頼政高倉宮をすゝめて兵を起しし時、京師を急に發して、倉皇として三井寺へ赴きしが、打忘れてやありけん、競にかくと知らせざりし程に、競しばらく猶豫して家にありしを、平宗盛聞きて、日ごろ競が魁偉なるを見て、己が所從にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば請ふべきやうもなかりしに、このたび競ひとり都に殘りしと聞きて、「六波羅に參れ」と人していはせければ、參りけり。宗盛對面して、「汝今より我につかへば、入道の恩にはまさるべし」とて、小糟毛といふ馬に貝鞍おき、乘替の料とて、遠山といふ馬を引きそへ、黑糸を

室鳩巢

大將　前右大將宗盛

どしの鎧・かぶとまで皆具してたびけり。競かしこまり賜はりて、ほくそ笑して罷り歸りぬ。

一族家人打寄りて、「入道殿、是程の大事を思ひ立ち給ふに、ひとり取残されしは、眞實に遺恨なり。大將のかくうちたへ語らひ給ふは、いなみがたし。『時の花をかざしにせよ。』といふ事もあれば、たゞ此のまゝにてあれかし。」といふを、競「いやとよ、勇士の義さはあらず」とて、宗盛よりたびける鎧着て、小糟毛に乘り、郎等七騎打連れて、三井寺へとて打出でしが、六波羅の門前を通りし時、馬にのりながら、門の内へのぞきつゝ、高聲にいひ入れけるは、「競こそ只今下し賜はりし馬にのり、三井寺へ罷り越し候。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れ難く候へば、このたび死を俱に致すにて候。御門前をむなしく打過ぎんは、ほいなく候へば、御いとまを申し候」とて三井

宇治橋　山城國久世郡宇治町にある宇治川に架す

平治　二條天皇の御代の年號

頼盛の母老尼　池の尼、清盛の繼母

寺にいたり、頼政と一所になりしが、其の後宇治橋の合戰に潔く討死してけり。

彌平兵衛宗清は、平頼盛の士なり。平治の亂に頼朝幼少にて、頼盛の家に囚はれしを、頼盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。其の時宗清、頼朝を朝夕にいたはりしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して、疎意なきよしをいはせける程に、頼盛ひとり一門に背きて都にとゞまりけり。其の後平家いまだ亡びずして西海にありし時、頼朝舊恩を謝せんために、頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召し具せらるべき由をいひおこされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に「いざ、つれて下らん」といひしに、宗清いひけるは、「頼朝、某に下れと候ふは、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領、引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてあるべく

石橋山
相模國足柄下郡石橋村にある山

候。今更源氏に諂ひて、其の蔭により候はんは、西海にある朋友共の承る所も口惜しうこそ候へ。君はかくて都に御安堵しおはしまし候へども、御一門は何れも西海に流落し給ひ、日夜安き御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るも痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、頼朝某が事を尋ねられ候はば、折ふし勞ること ある由を仰せられてたまはり候へ。」とて鎌倉へは行かざりけり。其の後西海へ下りけるにや、其の終を知らず。

伊東祐清は、伊東祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫の時、祐親に依りておはせしが、祐親頼朝を害せんとするを、祐清かなしみ、頼朝をふかく愛護し、ひそかにのがれ去らしむ。其の後頼朝兵を起して伊豆より相模へ赴きし時、祐親平家の味方として大庭景親等と石橋山にいたりて、頼朝を追ひ襲ひけり。其の後頼朝すでに東國

篠原
加賀國江沼郡
壽永二年木曾義仲平家の軍とこの地に戰ひ、大いにこれを破つた

元弘、建武
後醍醐天皇の御代の年號

を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕りて至りしを、其の罪を決するまで、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清を召し出だして、勸賞を行はれんとありしに、祐清「たゞ御恩には、早く殺され候へ。父囚はれ、其の子勸賞せらるゝ法や候。もし我を殺し給はずば、平家に歸すべし。」といふに、「さればとて、我を救ひし者を殺すべきやうなし。」とて、ゆるして放ちやりけり。祐清それよりすぐに京師に奔りて、平家に屬し、後、篠原の合戰に、つひに討死をとげけり。この三人、時代も大かた同じく、志節も相似たり。その清風高義、源平の間に求むるに、其の類すくなくおぼえ侍り。

さて元弘、建武の亂に至りて、天下板蕩の間、難に死し、節に死するの士、限なく相見え候ふ中に、翁かねて安藤左衞門聖秀がことを感じて落涙しけり。聖秀は、北條高時が臣なり。新田義貞の妻の爲に

東勝寺
鎌倉葛西ヶ谷にありし禪寺北條家の菩提寺で、高時以下こゝで自害した

は伯父なりしかば、鎌倉すでに陷る時、彼の女房、義貞の文に我が文を添へて、ひそかに聖秀がもとへぞつかはしける。聖秀は高時が將として新田の兵と戰ひしが、郎等大かた討死し、聖秀も薄手あまた負ひて引返しけるに、高時すでに屋形に火をかけて、東勝寺へ落ちけりといへば、「御屋形の燒跡には討死のもの多く見ゆるか。」と問ひけるに、「一人も見えず。」といふを聞きて、「口惜しきことかな。いざ、殿ばら、とても死なん命を、御屋形の跡にて心靜に自害せん。」とて、百餘騎を相從へて、屋形の跡へ赴きしが、今朝まで甍をならべて、さしも奇麗なりし大厦高牆、忽ちに灰燼となりぬるを見て、聖秀感慨にたへず、涙をさへ、惘然として立てたる所へ、彼の文をもて來りぬ。是を披き見れば、「鎌倉の有樣今はさてとこそ承り候へ。いかにもしてこなたへ御出で候へ。身にかへても申し宥むべし。」とあり。

武田勝頼
信玄の子
小宮山内膳友晴

聖秀是を見て、大きに色を損じて申しけるは、「我、今まで主恩に浴して人にしらるゝ身が、今事の急なるに臨みて、降人になりて出でなば、豈恥を知りたる者といはんや。されば女性心にてたとひかやうの事をいはるゝとも、義貞勇士の義を知られば、さる事やあるべきと制せらるべし。又義貞こなたの許否を試みるためにいひこさるゝとも、北の方は我がかたざまの名を失はじと思はれば、かたく是を拒がるべし。只似たるを友とするうたてさよ。」と、一度はうらみ、一度は怒り、彼の使の見る前にて其の文を刀に握り加へて、腹かき切つて死にけり。嗚呼、聖秀いかなる人ぞや。義氣の勇壯、志操の潔白、是に過ぎたることやあるべき。

さて近代にては、武田勝頼の臣小宮山内膳が節義こそ、最も感嘆するに餘りあり。内膳は勝頼近習の臣たりしが、天正年中の事にや、

天正　正親町天皇の御代から後陽成天皇の御代に跨る年號

天目山　甲斐國東山梨郡の東北隅にある山

内膳人と爭訟しける事ありつるに、勝頼讒人の言を用ひて、内膳が不直に決せしかば、内膳罪なくしてながく逐ひしりぞけらるゝ程に、是非なく家に蟄居して數月を經けるが、織田の兵甲州に亂入して、勝頼敗北し、故府をすてて、溫井常陸助を先とし、纔か四十二人の兵と、天目山中に奔るときこえしかば、内膳身をもて急に赴きしが、道にて追ひつけり。　さきの内膳と爭ひし者並に讒せし者を問ひけるに、「いづれもとくに逃げ去りぬ」といへば、内膳慨然として、かたへの人にいひける、「君、我を用ひずして棄て給ふに、今出でて其の難に死せば、君の明を損ずるに似たり。　又死せねば臣の義をやぶる。よし君の明を損ずるも臣の義をば傷らじ」とて、四十二人と同じく國難に殉ひけり。

此の難に、甲州の士皆勝頼を叛きて逃げ去りしに、四十二人ばかり

小田原陣　天正十五年、豐臣秀吉北條氏政を小田原城に攻め滅した

傾覆流離の間につきまとひて、いささか二心なく國難に殉ひしは、いづれも節義の士と申すべし。中に内膳は、讒をもて寃枉にあひしをも怨みず、從者の列にもあらぬ蟄居の身として、外より來りて死に赴きし事、其の忠烈はるかに溫井等が上にあるべし。　武田滅亡の後、東照宮、内膳が忠義を深く感じ給ひ、其の子なくして祭祀の絶ゆるをあはれみ給ひて、内膳が弟小宮山又七郎をめし出だされしが、其の後小田原陣の前、武職の人を極められしに、又七郎をもて御長柄槍奉行に仰せ付けられける。　其の時内膳が勝頼に對して忠義ありし事をくはしく仰せたてられ、誠に武士の手本とおぼしめす。　又七郎未だ弱手なれども、兄内膳が忠義を感じ、思召により て重き職を命ぜらるゝ由、上意なんありけるとぞ。　誠に死後のめいぼく、忠義の驗と申すべし。

二　二人の乞兒

享保癸卯
享保八年、中御門天皇の御代
室町
今日本橋區

近世風俗衰へて、利欲にさかしけれども、人の性もと善なる程に、族姓にもよらず、ならはしにもよらず、乞食體の者にも、はからざるに義理を知るの心あるぞかし。

享保癸卯の歳の十二月十七日、江戸室町の商人越後屋吉兵衛といふ者の手代市十郎、諸方の買置の金受取りて歸りしが、金三拾兩入れたる袋一つ見えざる故、定めて途にておとしたるものにてあらん、最早あるまじとは思ひながら、もと來し路を段々に尋ねありく程に、或處に、乞兒一人ありしが見咎めて、「何を尋ね候ふか。もし金を落さるゝにては候はずや。」といふを聞きて、市十郎嬉しくて、ありの儘に語りければ、「されば、とよ、我等拾ひ置きて候。その主の尋ね來ぬことはあらじと、それを待ちてこそ、先程より、此處に居るにて

候へ。いよ〳〵慥なること承り屆けて、違なくば渡し候ふべし。」といふ。市十郎、金の員數、又は中にある證文などのやう、一々いひ聞かせしに、「さては疑なし。」とて取出だし、袋のまゝにて渡しけり。市十郎餘りの事に、さてやみ難くて、内五兩取出だして、「これは、せめてそこの得分にせられよ。」とて與へけれども、なか〳〵受くる氣色なし。市十郎いひけるは、「この金はなき物にきはめ置きしに、そこの志故にこそ、再び手にも入りたれ。然るを、殘らずわが物にすべきにあらず。たつて受けてくれ候へ。」といへば、「よく考へて見給へ。その五兩を貰ふ心得ならば、三拾兩を返し申すべしや。もとより、自分の慾にて拾ひ置きたるにてなく候。定めて、落したる人、主人の金などならば、さぞ難義に及ばるべし。他人に拾はせなば、その落しし人には再び返るまじ。さらば、我等拾ひ置きて、その人に返

さまく思ひて、拾ひ置きたるにてこそ候へ。そこ許へ渡し候へば、われらが志通りて候。さらば暇申し候はん」とて、その儘其處を去りて、見返りもせで行きけるを、市十郎後を慕ひて、取りあへず懷中より金一星取り出だし、「今日は寒氣も強く候。歸られ候はば、これにて酒を求めてたべられ候へ」とて與へければ、「これは御志にて候儘申し受け候うて、これにて御酒たべ申すべし」とて、それをば受けて立ちわかれけり。名を尋ねければ、名は八兵衛とて、車善七が手下の乞食のよし申し候。

市十郎宅に歸りて、主人吉兵衛に委しく語りしかば、吉兵衛聞きて感涙にたへず、「何卒右の五兩を八兵衛に遣はしたし。明朝早く善七が宅まで持參し、善七にも申し聞かせ八兵衛に合點いたさせ、とかく受け候ふやうに計らひ候へ」とて、市十郎に手代頭をさし添へ

遣はしけり。さて、善七が許へ行きて尋ねければ、「その八兵衛と申す乞食は、昨夕何處にてやらん、金一切貰ひ候ふとて、善七へも見せ候ひしが、仲間の乞食ども呼び集め候うて、その金をもて酒肴もとめ、人にもたべさせ、その身もたべ候ひしが、喰べつけぬものを多く喰べ候うて、食傷いたし候ふか、今曉急死致し候」といふを聞きて、市十郎驚き、死骸を見屆け、善七に、「この死骸もらひたく候。かまへて粗忽に外へ移すべからず」と堅く言合はせ、さて家に歸り、その由を吉兵衛にいひきかせければ、早々人をつかはし、死骸を受けて取り、右の五兩の金をもて、本所無縁寺にて厚く葬りしとなん。吉兵衛も、義に感ずること商賈には奇特といふべし。

おもふに、八兵衛たゞ人にあらず、いかなれば乞食の黨には入りにけん。さだめてもとは賤しからぬ者にありしが、孤貧きはまりて、

家もなくして乞食してありく程に、外の乞食と一例になりて、是非なく善七が手下に屬しけるにもあらん。この八兵衛を士とし、又は人の上に置くとも、權柄をもて人の物を乞ひ求むるやうの事は決してすまじき者なり。されば世には、名は歴々の士大夫と呼ばれて實は乞食なる人もあり。この八兵衛は名は乞食なれども、實は士大夫といふべし。

野田山
金澤市の南郊

又、加賀の國に、野田山とてあり。前田家先祖以來、代々こゝに葬るゆゑに、家中の諸士も死すればその麓に葬らざるは少し。さる間、中元には、家々より墓前に燈籠を供ふ、毎歳のことなり。厚祿の家こそ假屋を造り人をつけ置きて守りもすれ、その外は、大方夜更くればともし捨てて歸りぬるに、下部の惡黨共來て、火を打ち消し、蠟燭を奪ひ取りけり。側に乞食と覺しき者、菰を被りて臥し居たり

けるが、それを見て、「人の祖考の爲とて、墓にすゝめけるものを、さやうに狼藉する事あるべからず。」と制しけるに、惡黨共諸共に罵つて、「菰をかぶる身として、いらぬ事いふ奴かな。」といひしに、その乞食聞きて、「各〻が今する樣なることをせぬ故に、菰をかぶる。」といひしとぞ。

この乞兒辭令にもよかりなん、言簡にして意足るといふべし。

たゞいつも繰言のやうなることなれども、いにしへも今も、唐もやまとも、節義の守ある人あれど、凍餒をさへまぬかれずして、溝壑に斃れて、其の名も世に知られぬこそかなしけれ。もとより幽隱の行を稱揚するは吾が徒の任なり。今物語せし乞食八兵衛が類、世になほ多かるべし。翁が聞かぬはいかゞせん。聞きてはいはざるに忍びず。昔、我が朝勅撰の和歌集を見るに、賤しき野僧・妓女の類も、天子・公卿と名を列するは、倭歌に尊卑の差別なし。是を倭歌

の德といへり。今翁が節義を語るとて、良家名族の士に、乞食などまでを並べ擧げて一つに稱するも、其の心亦しかなり。節義に貴賤のへだてなし。是節義の德といふべし。各にもきかれ候うて、翁が議論不倫なりと思ひ給ふべからず。

三　年にはづかし

朔風日夜に烈しく、寒氣もいやましなりしかば、講會もしばらくやみて、後日を期せんといふ程こそあれ、今年も覺えずはや暮れにけり。例の人々、翁が起居を問はんとて來りしに、翁むかひて、「この頃は年の暮とて、世上はさぞ忙がはしくこそ候はめ。しかるに、市朝に住みながら、翁が草堂ほど靜なることは侍らず。蕭然たる環堵の中に、いつとなく病に臥して、日を送り侍れば、月の過ぎ、年の暮るるをも覺え侍らず。されど歲月の逝くは惜むに足らず、唯悲むべきは年來學びしかひもなく、空しく、不德にて、身老い、年積りて、このまゝ朽ち果てんこそ、今更悔いてもあまりあることに候へ。」とて、

なにをして身のいたづらに老いぬらん
年のおもはんこともはづかし

といふ古歌を打ち誦して、「年にこそ恥づかしく候へ。諸君の如きは、春秋に富み材力に足る。もし懈らずして、日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども、歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず。唯孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。もし悠々として日を涉り、一旦年老い、齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でて、いかに悔ゆとも、何の益かあるべき。即ち、今の翁が身の上にて候。されば古詩にも、

なにをして云々　古今集、讀人知らず

少壯不努力云々 文選の語

陶淵明 晉の人、名は潛、靖節先生と號した

朱文公 宋の朱熹、文公はその諡號

陶侃 晉の人、陶淵明の曾祖父

少壯不努力、老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も

盛年不重來、一日難再晨。
及時當勉勵、歲月不待人。

といへば、古人もこの感懷を同じうするとぞ見えし。これらの詩句時々吟詠して、勇進の志を振ひ起すべし。又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣。歲不我延矣。嗚呼老矣、是誰之愆。

この文、言簡にして、意も明白なり。折節うちずんじて、自ら警むるによかるべし。それよりも翁が常に愛するは、陶侃が語なり。

大禹聖人、乃惜寸陰。至衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢。生

紹鷗 姓は武野、後奈良天皇時代の人、茶道の宗匠

利休 千宗易、利休はその號、正親町天皇時代の人、茶道の宗匠で紹鷗の弟子

無益於時、死無聞於後、是自棄也。

といへるこそ、學者志を立つるの法とすべけれ。前にいふ淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思ひ侍れ。凡そ人と生れて學に志ありといふ際の、生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ち果つるは、いと口惜しかるべきことなり。されば諸君も、この陶侃が語をもて自ら激昂して、日夜勤勉せらるべし。但し學は勇進をよろこぶと雖も、又急迫なるをきらひ侍り。とかく一生こゝを離れぬ事にて候へば、急迫にして求むべきにあらず。唯懈惰を戒めて、常に聖賢の書に優游涵泳せられば、久しうして自ら進益あるべし。

翁昔加賀に在りし時、士族の中に、紹鷗・利休が風流を慕ひて、茶の湯を好む者あり。江戸へ行役の時、道中茶具を持して、逆旅にても釜

道は須臾も
云々
道也者不レ可ニ須臾離一也。可キハ離ルレ非ニ道也。
（中庸）

をかけ、炭をおきて樂としけるを、同行の人見て、『いかにすけばとて、道中にてはやめよかし。』といへば、その人いふは、道中の日とて、一生の外にあらばこそ。これも一生の日數の内なれば、わが茶の湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん。』とて、その後もやめざりき。學者の道に志すもこの人の茶の湯を好むがごとくなるべし。もとより、道は須臾も離るべからざれば、一生の間、道を行ふ日にあらざるはなく、あふさきるさ、道のある所にあらざるはなし。然るを、急迫にしてもとめば、たとひ僅々にして得ることありとも、皮膚の間にてやみなん。いかでかそのしゝむらをかんで、滋味にあくことあるべき。況や急迫なれば、久しきに堪へぬものぞかし。未だ日至の時に及ばずして、やがて倦怠するに至りなん。翁おもへらく、學問は勉勵を要とす、たゞ急にして迫切

なるをおそる。義理は涵泳を貴ぶ、緩にして懈弛なるを戒む。迫切ならず、懈弛ならず、學者進修の道において、緩急相得て背かざるに近かるべし。」

昭和副讀本 卷四終

昭和五年九月二十一日印刷
昭和五年九月二十五日發行
昭和六年一月二十四日修正印刷
昭和六年一月二十七日修正發行

昭和副讀本 全五冊

卷數	定價	昭和六年度臨時定價
卷一	金參拾五錢	金五拾五錢
卷二	金參拾參錢	金五拾貳錢
卷三	金參拾五錢	金五拾五錢
卷四	金參拾錢	金四拾七錢
卷五	金參拾錢	金四拾七錢

著作者 東京市外中野町字大塚一六二五番地 保科孝一
發行者 東京市牛込區白銀町二十九番地 合資會社育英書院 右代表者 倉田八十八
印刷者 東京市神田區錦町三丁目十七番地 白井赫太郎
印刷所 東京市牛込區白銀町二十九番地 精興社

所有權著作

發行所 東京市牛込區白銀町二十九番地 振替口座(東京)七四二番 合資會社 育英書院
發賣所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 振替口座(東京)二八〇九番 日黑書店